日本福祉大学福祉社会開発研究所『日本福祉大学研究紀要－現代と文化』
第121号　2010年3月

シラーの『ヴィルヘルム・テル』について　2.

江　坂　哲　也

承前

2008年刊行の『現代と文化』第117号で，これと同タイトルの「1.」(以下この略号使用）を掲載し，そこでは「はじめに，影響史」から始め，「シラーの『テル』創作の立場とは？」，「伝説と歴史，詩人と現実」，「化身と試練」という項目ごとに，主人公テルを中心に論じてきた．そこでは，詩人シラーがテル「伝説」と「歴史」的事実を区別して創作していること，そしてこの主人公に古代ギリシアの英雄と啓蒙主義の化身という二つの姿をまとわせ，三つの試練を克服させて行くという新しいタイプの主人公を創りだしていることを指摘してきた．このテルはアキレスのような英雄であるがゆえ，試練に対しても果敢に挑戦して行くが，近代啓蒙主義の化身である．そのため彼は発展も，成長もしない．

この彼の対極にあるのが他の登場人物で，シラーは歴史的に実在したアッティングハウゼン，ルーデンツ，ヴァルター・フュルストなどの人物を自由に形象し，または実在しなかった牧師レッセルマンなどを必要に応じて挿入しながら，スイス三州の人民が舞台上で全体として成長するよう創作している．逆に言えば，彼らは主体的に行動する中で，若気の至りで過ちを犯したり，怒り狂ったり，時には絶望しながらも，外国の支配から独立し，かつての自治を回復する革命に参加する過程で，変身し，成長して行く．このタイトルの2.では，この彼らを中心に論じ，最後に「1.」で展開したあのテルとの関係に言及し，「完」としたい．

文学的「普遍性」について

アリストーテレス（Aristoteles BC 384-22）は『詩学』（Die Poetik）の第9章でこう書いている．「詩人の課題は実際に起こったことではなく，むしろ起こり得るであろうこと，すなわち蓋然性（Wahrscheinlichkeit）または必然性（Notwendigkeit）の規則に従った可能性（das Mögliche）を伝えることである．歴史の記述者と詩人の違いは（中略）前者が実際に起こった

ことを伝えるのに対して，後者は起こりうるであろうことを伝えるという点にある．だから文学は歴史的叙述より哲学的なもので，重大なものである．なぜなら文学はより多く普遍なものを (das Allgemeine)，歴史的叙述はそれに対して特殊なものを（das Besondere）伝えるからである」[1].

こういう歴史家に対して，詩人は「起こりうること」という「可能性」を登場人物たちに演じ (handeln）させ，観客の方はその主人公たちと苦しみを共にしながら（mitleiden)，彼らに同化し，劇の筋（Handlung）に引き込まれて行く．そのために，詩人は様々な人物像を観客や読者と同じように生きているかのように創作するわけであるが，シラーはこの作品では，「1.」で述べたように，「メルヘン」的と見做されたテルを歴史家チューディの記した人物以上に，実際に生きていたかのように肉化した．これが「普遍的なもの」にするために文学の採る形象化という方法で，最も重要なものである．ところで，文学が素材を過去の事件に求め，それに忠実であろうとすれば，縛られざるをえないような歴史的事実というものがある．ところがシラーは，この劇が彼の時代の観客にも，さらに私たち現代の読者にも通ずるように，つまり「普遍化」のために歴史を意図的に変えているように思われる．それは，チューディの『スイス年代記』に記述されたルーデンツをシュタウフファッハーの甥から，アッティングハウゼン男爵のそれに変えたなどということではない．人名などはよほど有名な人物のものでないかぎり，各登場人物を他と区別し，特定するための，ある意味では記号に等しいものと言えよう．それゆえ劇作の必要から，その男爵に甥ができても，さらにその甥の名前がルーデンツとなっても，彼という人物 (Charakter）の「蓋然性」が生き生きと観客に伝われば，かまわない．

ところが称号ともなると，社会的地位や身分を表すものだから，そうでない者にその称号を勝手につけたり，逆にその人物から奪って舞台に上げれば，歴史を素材にしたその作品に混乱を持ち込むことになろう．実際この『テル』には「皇帝」という称号が 64 回も出てくるが，いつも歴史的事実にのっとって使われている訳ではない．ではそれを，かつて歴史学の教授であったシラーが，なぜあえてしたのであろうか．それはまさに『テル』という文学作品の普遍化のためだったのではないだろうか．では，どういう種類の普遍化のために？

この作品の第 1 幕 1 場で既にこの意図的誤用が始まる．バォムガルテンは妻を陵辱しようとした代官を打ち殺してしまい，そのため彼の家来たちに追われている．湖を前にして，逃げ場を失った彼は，舟を出してくれるよう人々に助けを求めるが，その事件の経過を説明する台詞で，殺した相手を「皇帝（Kaiser）の代官」(第 77 詩行，以下の引用では詩行数のみを記す)[2] と呼び，その顛末を聞いていた牧夫クオニは「国王（König）の代官」(130）と言い換えている．ドイツ史に通じていない読者は「皇帝」と「国王」という二人がいるのかと思いこむかも知れない．これとは逆に，その中世史に通じている観客は当惑せざるを得ない．なぜなら，この代官をウンターヴァルデン州に遣わした者が，この二つの称号を持っていれば問題はないが，「皇帝」という称号は史実と異なるからである．レクラムの『解説と資料，フリードリッヒ・シラーのヴィルヘルム・テル』でも，「ルードルフ一世もその息子アルブレヒトも皇帝の冠は受けていないし，塗油

されていなかった．シラーは全く自由にこれを扱っている」[3] と書いているが，私にはそれが単なる「自由」とは思えない．とにかくこの二つの称号は時に混乱を引き起こし，作品理解に支障を来たすことにもなる．このような支障を取り除き，さらにその称号使用におけるシラーの意図を明らかにするためにも，この二つの関係をまず史実として明らかにしておく必要があろう．

この称号ほどではないにしても，同じような混乱のもとになるものとして，21 回出てくる「帝国」(Reich) がある．これはほとんどが「オーストリア」と対立的に用いられているため，前述の称号ほど支障はないにしても，その例外が第 5 幕第 1 場に出てくる．その場でペーターマンが「帝国（Reich）の使者がこんな文書を持参しました」(3031) と，王妃エリーザベトが認めたそれをヴァルター・フュルストに渡し，それが皆の前で読まれると，そこに居合わせた人々は「この王妃は何をお望みだ．彼女の帝国（Reich）は終わったのに」(3034) と怪しむ．この「帝国」はそれまで対立的に呼ばれていた「オーストリア」とほとんど同じものであるが，意味は実に深長である．それ故ここで，これらに関する歴史的事実を押さえておきたい．

「皇帝」と「帝国」について

まず「皇帝」から始めよう．この称号がゲルマン民族の地で生まれたのは，教皇レオ三世 (Leo 3. 在位 795-816) が 800 年 12 月 25 日に，フランク国王カール大帝（Karl der Große 742-814, 王位 768-814，帝位 800-14）に，こう言って戴冠した時である．

> ＜Carolo piissimo augusto, a Deo coronato magno et pacific imperatore (sic), vita et Victoria!＞[4]（下線，引用者）
> 「カールに，ことに敬虔なるアウグストゥスに，神によって冠を授けられた，偉大で平和を築くインペラトールに，命と勝利を！」(拙訳)

この言葉は「キリスト教の敬虔な信者として，この宗教と私を脅かす外敵から守り，さらにその布教拡大に力を貸してくれ」と解せよう．これを契機にこの聖と俗の両権力が共通の利益を求め，手を携えて行くこととなり，その結果フランク王国の拡大につれ，その新しい領土にはキリスト教会や修道院が建ち，布教が進むことになる．この戴冠によりカール大帝は「皇帝」となり[5]，『テル』の登場人物ゲルトルートの表現によれば，「キリスト教徒の中で最高の人」(266) となった訳である．

この戴冠という儀式のもう一つの結果は，西でのローマ帝国の復活とされ，フランク「王国」をその「国王」が，ローマ「帝国」をその最高の人である「皇帝」が同一人物として治めることとなり，500 年後の『テル』の舞台でもシラーによって，そういう設定になっている．このカール皇帝誕生前は，東にはコンスタンチノープルを首都とするローマ帝国が存続していたが，西のそれは 476 年に，西ゲルマンの首長オドアーカー（Odoaker 433-93）によって皇帝ロムルス・

アウグストゥルス（Romulus Augustulus）が退位させられ，滅んでいた．それがこの儀式により復活したことになる．カール大帝とその息子ルートヴィッヒ一世（Ludwig 1. der Fromme 778-840，帝位 813-40）の死後，このカーロリンガー朝のフランク王国はその子孫の争いにより，843 年のヴァルダン（Verdun）条約そして 870 年のメールセ（Meerssen）条約によって，イタリア，フランスそしてドイツの三国に分割された．そのドイツでの王朝は 911 年に滅び，919 年ハインリッヒ一世（Heinrich 1. 875 頃-936，王位 919-36）が国王となり，オットー朝（Ottonen, 919-1024）が始まる．その跡を継いだオットー大帝（Otto der Große 912-973，王位 936-73，帝位 962-73）は教皇の救援要請に応えてローマに遠征し，962 年に教皇から帝冠を授けられ，彼の王国が「ローマ帝国」を継ぐものと見なされた．オットー朝の後を継いだのはザーリア朝（Salier，1024-1125）で，その創始者コンラート二世（Konrad 2. 990 頃-1039，王位 1024-39，帝位 1027-39）の治下の 1034 年に「ローマ帝国」（Romanus Imperium）という名称が初めて用いられた．次のシュタウファー朝（Staufer，1138-97）のフリードリッヒ一世（Friedrich 1. Barbarossa 1122?-1190，王位 1152-90，帝位 1155-90）は 1155 年帝冠を授けられると，教会に対してその宗教的位の高さを強調して，1157 年より「神聖帝国」（Sacrum Imperium）という国名を用いるようになった．1254 年以来，国王文書では「神聖ローマ帝国」（Sacrum Romanum Imperium）という国名が定着し，15 世紀になると，その公式名称に対して「ドイツ国家」（Deutsche Nation，ラテン語で Nationis Germanicae）という非公式名が出てくる．この名称は帝国のドイツ語圏だけを指すものであったが，後にドイツ人の要求により，これが「帝国」の前に置かれ，「ドイツ帝国」（das Deutsche Reich）となる．この名称の変遷はそれぞれの時代背景を表してはいるが，あくまであの復活したローマ帝国の継続とされ，15 世紀以降に出現する「ドイツ国家」およびその「帝国」という非公式名称は，民族意識の芽生えと成長を表していよう．

ところで前記のように，1225 年から「神聖ローマ帝国」という名称は出てくるが，それは「国王」（König）文書にであって，「皇帝」（Kaiser）のものではない．そもそも，この国名を最初に出したヴィルヘルム・フォン・ホラント（Wilhelm von Holland 1227-56，王位 1247-56）は国王のままで終わっている．この「帝国」と「皇帝」という二つの名称がほぼ合致していたのはシュタウファー朝までで[6]，その後シュタウファーとヴェルフェ（Welfe）両家の争い，空位時代そして小国王時代（1273-1313）となり，全国をまとめるような強大な国王は出現せず，「帝国」という名前だけが残り，「＜帝国＞と国王は直接一致していなかった」[7]．とにかく帝位は教皇の戴冠により授けられたのであって，その後ハープスブルク家（Habsburger）が政略結婚により伸張し，この伝統にのっとって皇帝になった最後の国王は，この家のシュタイアー（Steier）系出身のカール五世（Karl 5. 1500-58，王位 1519-56，帝位 1530-56）で，それ以降はローマ帝国国王に選ばれ，王位に就くと，同時に「皇帝」という称号を名乗り，それが 1806 年まで続くことになる．

教皇による戴冠とは無関係の，この新しい形での「皇帝」の称号，そしてその「帝国」名が歴

史から名実ともに消えるのは，1806 年 8 月 6 日で，その 2 年前にナポーレオン（Napoleone Buonaparte 1769-1821，フランス皇帝位 1804-14/15）との戦争で敗北を喫していたフランツ二世（Franz 2. 1768-1835，王・帝位 1792-1806）の宣言によってである[8]．その 1 年前の 1805 年に，この作品を書き終えたシラーは帰らぬ人となっていたのだが，それまではオーストリアを中心としてハンガリーなどを含む広大な「ローマ・ドイツ帝国」が，あの「神聖ローマ帝国」を継ぐものとして存在していた．しかし他のドイツの地は小国に分裂し，30 年戦争（1618-48）後にはさらに数百の領邦国家に分割されていたのであって，シラーは 19 世紀の初頭，その一つであるカール・アウグスト（Karl August 1757-1828）侯爵領のヴァイマルで，詩人としてこの『テル』を創作していたことになる．こうして見ると，この作品の第 2 幕第 1 場のルーデンツの台詞は，シラーによって舞台設定された 1300 年頃の「分裂という厳しい」(887) 小国王時代だけを表しているのではないだろう．シラーはその 25 年前の 1781 年に，「ドイツを共和国に統一してやるぞ，ローマもスパルタも尼寺になるようなものにな」[9] と，『群盗』（Die Räuber）で書いていたが，今回はフランス革命の進行状況を見ながら，舞台をスイスに移し，ゲーテが催していた隔週ごとの水曜「サークル」(Kränzchen)[10] などで，ワインを飲みながら議論していた内容が，この『テル』に反映していると言えよう．では，それは何かという問題，これが「帝国」そして「国王」と「皇帝」という呼称とも関係しているように思われる．

以上でこの ＜「皇帝」と「帝国」について＞ の項を終えたいが，歴史を事実として抑えるためとは言え，記述が少し詳細に至り過ぎたようにも思える．そこから生ずるかも知れない混乱や誤解を避けるため，ここで少し付け加えも含めて，二つのことを簡単にまとめておきたい．一つは，「皇帝」という位は，キリスト教国の「国王」がローマ教皇の戴冠によって授けられるもので，それゆえテルの時代に「皇帝」はいなかった．そして「帝国」は存在したが，名のみで，かつてのように強大な権力を持たない，選挙で選ばれただけの小「国王」が在位するだけで，スイス三州の人民と対峙したのは，そのような国王としてオーストリアを中心に治めていたハープスブルク家のアルブレヒト一世（Albrecht 1. 1255-1308，王位 1298-1308）であったということ．もう一つは，『テル』が創作されていた時代についてである．教皇による戴冠なしで，同家出身の強大な自称「皇帝」が「神聖ローマ帝国」という名で，オーストリア・ハンガリーなどの広大な国を治めていたが，その詩人シラーがこの作品を創作していた他のドイツ語圏には，分裂した小さな領邦国家が多数あるだけで，もちろん皇帝などはいなく，統一的な国というものはなかった．

ばらばらな三州と受身の人民

「皇帝」と「国王」という二つの呼称が続いて初めて出てくる前述の第 1 幕第 1 場で，人民はバォムガルテンの行為を「正当」(98) と認めるが，自分の身可愛さに，自分たちの手で彼を救うことはできない．彼は偶然通りがかったテルに助けられるが，その彼を逃してしまった代官の

家来たちはくやしまぎれに，そこに居合わせた牧夫の羊を殺し，漁夫の小屋に放火する．その乱暴に手をこまねいて，「天の神よ，この国に救い主はいつ来るんでしょうか」(181f.) と言う，この漁夫ルーオディの台詞でこの場は終わる．自分の妻を凌辱しようとする者に対して突発的に歯向かう夫，その彼を助けたいと思っても，自分たちの身の安全を考えると，尻ごみせざるをえない人民たち，こういう彼らにとっては，その支配者が「皇帝」と呼ばれる者であろうと，「国王」であろうと，日本語でいう「お上」である．彼らは団結して権力の横暴に立ち向かうことはまだできず，あのルーオディの台詞が如実に示すように，救世主待ちの他力本願である．

第 1 幕第 3 場では，ウーリ州の人民たちはまさに自分たちを支配するための，あからさまに「威圧」(Zwing) という名を冠した「ツヴィング・ウーリ」(Zwing Uri) 要塞建築に駆り出され，「なんとも酷なことだな，俺たちを強制し，ぶち込む監獄用の石を運ばされるとは」(359f.) と，その用途を知りながらも，賦役監督の「お前らは自分の事をやれ，俺は俺の務めを果たすまでだ」(368) という命令に，否々ながらも従っている．

人民に服従心を植え付けるため，人通りの多い村の真ん中に柱を立て，その上に帽子を掲げ，その前での敬礼を強制する，その口上はこうである．

代官さまの前にあるがごとく，この帽子を敬い，　396
脱帽して膝を曲げ，崇めるべし —— それにより
国王（König）は従順な民を識別されんと欲す．

それを見た市民の一人は，「これが皇帝（Kaiser）の冠だったら，まだましだが，こいつはオーストリアの帽子じゃないか」(407f.) と言う．それに続いて，要塞建築に駆り出されていた石屋の親方は，「オーストリアの帽子だ．気をつけろ，俺たちをオーストリアに取り込もうって罠だぞ」(410f.) と，皆に警告する．

ここでは「皇帝」に対して「オーストリア」という地名が現れる．これを現在では国名と勘違いする恐れもあるが，前項で述べたように，テルの時代では神聖ローマ帝国という名のみが残り，単に選ばれただけの小国王であるアルブレヒト一世の直接統治地域がそれで，彼はその領主で，爵位としては公爵（Herzog）であった．その彼が国王に選ばれると，スイス三州を「取り込もう」(verrathen，「裏切る」の意）としている訳である．では，どこをスイス人民に「裏切らせ」，オーストリアに付かせようとしているのか．それはこの前の第 2 場で交わされた二人の台詞から明らかである．そこでは，既にオーストリア支配下にあるルツェルンのプファイファーがシュヴィーツ州のシュタウフファッハーを訪れ，こう忠告していた．

プファイファー：避けられるなら，オーストラリアに誓わないことです．　184
これまでと変わらず，実直に，帝国（Reich）にしっかりと付いていれば，
古くからの自由にこだわっているあんた方を，神は守ってくださる．

(中略 ―― 引用者，以下同)

シュタウフファッハー：他の皇帝が帝国にやってくるのは早いかも知れません．　193
あんた方はオーストラリアに付いて，それが永遠に続くのですからね．

ところが「帝国」は名のみで，実体のないものであることは前述したとおりである．史実では「皇帝」はいないが，『テル』という文学の世界ではアルブレヒト一世がその帝位につき，その彼の後に「他の皇帝」がやってくるという希望を持ち，古くからの「自由」にこだわり続けることの重要性を説いている．オーストリアに一旦つけば，その自由が永遠に失われるという訳である．この「自由」の内容がこの劇の要であるが，ここではアルブレヒト「公爵」が「帝国」の「国王」と「皇帝」であるにもかかわらず，オーストリアという彼直属の狭い地域にこだわった政治をし，広いドイツ語圏，さらにはもっと広いキリスト教圏全体という視野を失っていることが問題になっているようである．しかし，それが観客にはここではまだ良く分からない．私もその視点を暗示するだけにとどめ，先に進もう．このシュタウフファッハーはシュヴィーツ州の長老で，オーストリアが派遣した代官ゲスラーに睨まれ，これまで耕してきた土地や蓄積してきた家財を没収されるのではと悩み，それを妻のゲルトルートに打ち明け，彼女に励まされ，同じように代官の横暴に苦しんでいる隣のウーリ州の長老ヴァルター・フュルストと相談しようと，彼の家に向かう．

その家にはウンターヴァルデン州の若者メルヒタールがかくまわれている．彼は牛を使って土地を耕していると，若僧が現れ，その牛を代官の命によりもらって行くから，「百姓はパンを食いたけりゃ，自分で鋤を引くがいい」(475f.) と罵られた．代官たちは牛を現地調達で食料にでもしようと，若いのを寄こしたのであろう．メルヒタールは一緒に働いてきたその家畜の「牛でさえ，不当と感じたのでしょう，モーとうなり声をあげ，角を突き上げるのを見ると，ムラムラと怒りがこみ上げ，我を忘れ，その若僧を棒で殴りつけ」(478ff.)，その指を叩き折ってしまった．そしてこの代官の家来たちに追われる身となり，隣のウーリ州に逃げ込み，このヴァルター・フュルストの家にかくまわれている．彼はこの若者の直情・短気をたしなめ，「その若僧は代官の者だ．お前のお上に派遣されて来たのだ．それでお前は罪に落ちてしまったのだから，いくら重くても，その償いを受けなければならない」(470ff.) と諭していたのだが，彼のその言い分を聞くうちに，彼に理解を示すようになる．この第 4 場でも，若者らしい突発的な反抗はあるが，長老たちはそういう「お上」にどう対応すべきか考えあぐねている．

そこにあのシュタウフファッハーが訪れ，家の戸をノックする．その音を聞いて，彼はメルヒタールを探索している代官の手先ではと思い込み，彼を奥に隠し，その来訪者を客として招き入れる．この両州の長老二人は国王の代官たちの支配下にある三州で起こった数々の出来事の情報を交換しあっているうちに，来訪者の方はその当人が奥に隠れ，聞き耳を立てているとは知らず，彼の父親が代わりに捕えられ，さらに両目をえぐりだされ (Vgl., 575f.) と話してしまう．そして飛び出してきたその若者に，父親は「財産を没収され，杖一本だけ許されて，着のみ着のままで，戸口から戸口へと盲目の乞食をしている」(605f.) と告げる．メルヒタールは，すぐにでも

父親の復讐に出かけると，いきり立つ．この三人のやり取りを聞いてみよう．

ヴァルター・フュルスト：待ちなさい．
　彼に対してお前に何ができる．ザルネンの高い大きな城に
　居座り，安全な要塞に守られている代官に，　625
　お前の無力な怒りは嘲笑されるだけだ．
メルヒタール：　（前略）　僕はきっと，
　同じ考えの若者が 20 人もいれば，あいつのもとへと血路を拓き，　630
　あいつの要塞を落としてやりますよ．（中略）―― あなた方が皆
　自分の家と羊の群れを案じて，暴君に屈従しようとも ――（中略）
　僕は山で羊飼いたちを呼び集め，　635
　そこで遮るものない（frei）天の屋根の下で，
　そこなら感覚は新鮮で，心は健全そのもの ―― そこで
　この恐ろしい惨たらしい話を語ってやりますよ．

ヴァルター・フュルストやシュタウフファッハーが暮らす麓より，山の上は自由（frei）で，感覚も心根も健全な民がいるという訳である．これは第 2 場で，あの要塞の建築現場を目の当たりにし，「人の手で造ったものは，人の手で壊せる」と呟き，アルプスの山を指して，「自由の家は俺たちのために神が建てて下さってある」（387f.）と，妻と子供の待っている山の家に帰って行ったテルの言葉に通じよう．そしてルソーの「自然に帰れ」という思想を，さらに神に守られ，神の声に耳を傾ける純朴な牧人たちをも連想させよう．

シュタウフファッハー：（ヴァルター・フュルストに）
　これはもう極限ですな．それとも待ちますか，　640
　まだ最悪のことが……，
メルヒタール：　　恐るべきどんな最悪のことが
　まだあると言うのですか，目の中の玉でさえ
　安全といえない状況ではないですか．
　―― 私たちは本当に無防備でしょうか．何のために弓を
　引き絞り，重い斧を振り回し，戦う練習をしたのでしょうか．　645
　どんな生き物にも，絶望の恐怖に襲われれば，最期の武器が授けられ，
　　（中略）
　人間のおとなしい家族で，鋤を引く獣でさえ，　650
　首の恐ろしい力をくびきに繋がれ，
　じっと垂れていますが，

挑発されれば，飛び上がり，角を研ぎ澄まし，
敵を空の雲めがけて突き上げますよ．
ヴァルター・フュルスト：三州が私たち三人のように考えれば，
ひょっとしたら何ごとか，できるかも知れない．　640
（中略）
ヴァルター・フュルスト：私たちとオーストリアの間に　701
審判者がいれば，権利（Recht）と法（Gesetz）にのっとり，
決めて下さるだろうが，私たちを抑圧するのが皇帝（Kaiser）で，
最高の裁判官であるとは！ —— これでは神が私たちを
救って下さらなければ，だが，それは私たちの腕を通してだ．　705

これでシュヴィーツ州の長老シュタウフファッハー，ウーリ州の同じく長老のヴァルター・フュルスト，そしてウンターヴァルデン州の若者メルヒタールは自分たちの州の人々に，皇帝を相手に武器を取って戦いを挑もうと訴え，その仲間を集める行動に出る．私はこの引用の最後の 2 詩行のダッシュからを，できるだけ原文に忠実に訳したつもりだが，その原文詩行はこうである．

— so muß　Ｇｏｔｔ　ｕｎｓ　ｈｅｌｆｅｎ
Ｄｕｒｃｈ　ｕｎｓｅｒｎ　Ａｒｍ —　705

これは活字間をあけて，強調を表している．そしてその内容は「神が人民の腕を通して現れ，彼らを救うに違いない」という「人（民）権神授説」と呼べるもので，「王権神授説」に対抗するものである．そのためにアルブレヒト一世は「国王」に止まるのではなく，天と地を繋ぐ鍵を授けられた法王に塗油された「皇帝」にされなければならなかった，そう解されよう．しかもこの ＜Arm＞（腕）は「軍隊」(Armee) と同じく，古くは「武器」という意味を持ち，「力」という意味もある．彼らの企てはまさに「武装蜂起」である．そして，この三人はそのための会議を開こうと呼びかけ，敵の代官たちに察知されないように，各州の代表を夜中に，人里離れたリュートリという地に集めることを申し合わせ，そこでの再会を約束して，それぞれの担当州に出かけて行く．

ここで注意しなければならないことは，先ほどの「帽子に敬意を示せ」という場では「皇帝の冠」と「オーストリアの帽子」が対立するものとして表され，さらに第 1 幕第 2 場のプファイファーとシュタウフファハーの間でも「帝国」と「オーストリア」が同様に表現され，二つのものが対立しているように観客は思わされていたが，先ほど暗示したように，ここに至って初めて，同一人物の資質が問題とされていることに気づかされる．そして劇の進行とともに，その質の内容が明らかにされて行く．

リュートリで人民はバラバラから，統一へと成長する

リュートリに 10 人の仲間を集めて先着していたメルヒタールは，シュヴィーツ州の同志と共に到着した長老のシュタウフファッハーを迎え，盲目にされた父親に会った時の自分の気持ちを，「父の光を失った眼差しから，燃えるような復讐の念を吸い取ってきた」(990f.) と語る．それに対してこの長老は，個人的なレベルに止まっている若者を叱咤して，「復讐のことなど言うな．過ぎたことの仕返しにではなく，迫りくる禍に我らは備えようとしているのだ」(992f.) と，もっぱら皆に「共通する件」(gemeine Sach', 995) に話題を向ける．彼はその若者からウンターヴァルデン州の代官たちの暴政や，それに対する人民の反応を報告されると，「短い間に大きなことをやってくれましたね」(1054) と褒め，ねぎらう．この場ではこの「共通の件」が問題なのであって，それには「僧院の奉公人で，自由ではない」(1078f.) 者，つまり農奴でも「この州を愛する」(1082) 者なら代表として迎え入れられ，コンラート・フンとマイアーは「法廷で古い遺産相続の件で争う仲でも」(1087f.)，この件では「統一」(einig, 1090) するのである．

ところで，この統一の必要性は，すでに第 1 幕第 3 場の初めに登場していた前出の二人，すなわちウンターヴァルデン州から逃げて来たメルヒタールと，その彼をかくまっていたウーリ州の長老ヴァルター・フュルスト，この二人の次のような会話から明らかであった．

ヴァルター・フュルスト：　　お前はこのウーリ州にいても，　　495
　代官ランデンベルクの力（Arm）から逃れているとは限らない．
　圧政者どもは助け合っているのだからな．
メルヒタール：僕たちは，どうすべきか，あいつらから学ばなくちゃ．

このように協働している敵に対抗するためには三州の団結が必要だということを，若いメルヒタールは自分の経験とこの長老の言葉から察知しているが，自分たちの歴史を知らない．しかも人民の側はその共通の敵から不当な攻撃を受けているが，個々人は他人に同情しこそすれ，自分のことが第一で，仲は疎遠で，他人同士のたんなる集合でしかない，これが現実であった．しかし，とにかくシュヴィーツ州のシュタウフファッハーを加えた，この三人がまず協力して，リュートリの集会にこぎつけた訳である．

そして今その地にウーリ州の味方を連れて，長老のヴァルター・フュルストがやっと到着し，三州の代表がそろった．牧師レッセルマンが「古い慣習（Gebräuche）に従って会議を開きましょう」(1111) と提案し，シュヴィーツ州長老のシュタウフファッハーの「古い風習（Sitte）に従って会議をしましょう」(1119) という音頭により，州会が始まるのだが，その二人の台詞では二回も「古い」という語が繰り返されている．バラバラである三州が統一して，オーストリアが派遣した代官たちに対抗するために，「古い」しきたりが持ち出され，三州が共に参加した「ロー

マ遠征」(1134) にまで，歴史が遡られる．そして各州がその過去で果たした役割に従って，シュヴィーツ州が「会議」(Rath，1138) を仕切る議長を出すことになり，最年長の鍛冶屋のウルリッヒの名がまず挙げられるが，彼は「自由の身分ではない」(1141) として，その次のレーディングが皆の賛同でその座に就く．共通の件では統一するにしても，この段階ではこのように「自由」を基準とした身分差別があること，これは記憶にとどめておこう．そして蜂起の際は，かつてローマ遠征の「戦場」(Felde, 1138) でのように，ウーリ州が主導することになる．

さらに三州の新しい同盟を強固にするため，歴史がさらに遡られ，長老シュタウファーの 38 詩行にも及ぶ叙事的詩行により，それを知らない若者たちにも，かつては皆一つであった事実が授けられる．その内容はこうである．北方の大きな民族の地に飢饉がおこり，10 人中ひとりの割合で祖国を去ることが籤で決められ，その男女の大集団は南に向かって放浪の旅に出た．剣で道をひらきながら，ドイツの国 (Land) を通って，この地にたどりつくと，そこはかつての祖国に似て，樹木が茂り，泉が湧いているのも発見し，さらに人の住む気配もないので，ここに定住することに決め，汗水たらし森林を開拓した．その後人口が増え，その地域だけでは不足になると，黒い山や白い地にまで移住して行った．それが今の三州となっているのだが，元は同じ血を引く民族であるという歴史的事実が語られ，これを聞くと，

石屋のハンス：そうだ，俺たちゃ心は一つで，同じ血が流れているのだ．
一同 (握手を求め合いながら) ：同じ民族だ，統一してやろう．　1204

これがこの場の最後にリュートリの誓いの一つ，「我ら兄弟のごとき一つの民族であろう」(1548) となるが，この「民族」の原語 ＜Volk＞ は「人民」という意味もあわせ持っている．勤労辛苦のすえ自然の森林を切り開き，自分たちで作ってきた家々，シュタンツやアルトドルフなど皆で建設してきた市町村，それらを繋ぐ道路や橋，これらの集合が今の三州である．これらは農民たちが自分たちの労働で自然から勝ち取ってきた成果である，それらすべてを丸ごと支配下に置こうとしているのがオーストリアから派遣された代官たちである．この外部勢力に抵抗するため，このように歴史を掘り起こし，バラバラであった三州と疎遠であった個々人が兄弟のように統一し，団結するのだから，これは「人民」の意味をも含んだもので，これがドイツ語の＜フォルク＞ である．これに続くシュタウフファッハーの台詞がそれをよく表している．

シュタウフファハー：他の人民 (Völker, Volk の複数形) はよその軛に　1205
繋がれています．彼らは勝者に屈伏してしまったのです．
私たちの州内にさえ，外 (fremde) に義務を負っている
隷属の民が多く生活していますが，
彼らの隷属状態 (Knechtschaft) は子々孫々と受け継がれて行くのです．
しかし私たちは古いスイス人の生粋の種族で，　1210

ずっと自由を保ち続け，
どんな領主（Fürsten）にも膝を屈せず，
皇帝の庇護は自由意思で選んだのです．

暗示されていたものを，観客は若者と共に学ぶ

これを受けてレッセルマンは，こう繋げる．「自由に私たちは帝国の保護と庇護を選んだのだと，そうフリードリッヒ皇帝の書状（Kaiser Friedrichs Brief）にあるのだ」(1215)．これまでの原初の歴史に対して二つ目の歴史的に「古い」ものが，しかも初めてフリードリッヒという固有名詞が「皇帝」という称号を冠して出てきた．ところが観客にこれは，既に数回ほのめかされ，暗示されていたのである．

その最初は第 1 幕第 2 場であった．代官ゲスラーに「農民風情が勝手に家を建てるとは」(231) と，睨まれたシュタウフファッハーが思い悩んでいるとき，その夫を慰め，励まし，奮い立たせようと，妻のゲルトルートは「古い皇帝の羊皮紙」(die Pergamente der alten Kaiser, 244f.) の話から始めるが，これが何であるのか，これは彼女の台詞で次のように暗示されるに止まっていた．

―― 代官があなたを恨んで，危害を加えてやろうとするのは，　252
彼にとってあなたが邪魔だからですわ．
あなたのためにスイス人が新しい領主家（Fürstenhaus）に
服従しようとしないで，立派なご先祖さまたちが
そうなさったように，帝国（Reich）につき
しっかりと忠誠を守っている，そう代官は思ってるんですわ．　257
（中略）
彼はあなたを妬んでいるんですわ，あなたは自由な男として　260
ご自身の相続で幸福に暮らしていらっしゃるのに，
―― 彼には何もないのですからね．あなたの家は皇帝（Kaiser）と
帝国（Reich）から直々の知行なんですから，堂々と見せて良いのです，
帝国領主（Reichsfürst）が自分の領土（Länder）を見せるようにね．
だって，あなたはご自分の上にはキリスト教徒の最高位の方だけで，　255
それ以外にどんな主人も認めていないのですからね．

このように第 1 幕で妻のゲルトルートがポロッと口に出した「羊皮紙」の内容は暗示に止まっていたが，この第 2 幕のリュートリの場に至って，ようやく明らかにされるのである．それまでは「皇帝」とか，「国王」とかの称号が，観客にはよく分からないまま出てきたが，実は過去の

皇帝と現在の国王・皇帝という別人が二人いたのだ．この妻の台詞では「新しい領主」,「帝国」,「皇帝」そして「帝国領主」の関係が良く分からなかったが，一人は自由承認状を認めた過去の「皇帝」フリードリッヒ（この固有名詞はあの 1215 詩行に出ていたが，これが最初にして，最後である）で，その彼が治めていた「帝国」が神聖ローマ帝国である．もう一人がこの「新しい領主」で，実はこれがアルブレヒト一世であるが，この固有名詞はずっと後の方で，第 5 幕第 1 場の 2947 詩行に，これもたった一回出てくるだけである．シラーは歴史に素材を取っているが，このように固有名詞は決定的なところでポロッと顔を出すだけに止め，後はすべて「皇帝」とか「国王」という主権者，または最高権力者の称号で済まし，これによって歴史を普遍化している．ところで，ゲルトルートの台詞の 254 詩行にある「領主家」(Fürstenhaus) の ＜Fürst＞ が問題である．これには普通二つの意味があり，一つは皇帝や国王の下位に立つ「君主」，もう一つは大公と男爵の間の爵位で，「侯爵」という意味である．すると，これは 254 詩行の「帝国領主」(Reichsfürst) の ＜Fürst＞ とは違う．「帝国」の「領主」は当然「皇帝」となり，普通の二つの意味，すなわち皇帝の下の「君主」と爵位の「侯爵」とは違ってこよう．シラーは明らかにこの原義の ＜der Vorderste＞「先頭の人」や ＜der Erste＞「第一人者」の意味で使っている．それゆえ 254 詩行の「新しい領主」は，彼がどのような領土の「第一人者」であるかが問題で，このシュタウフファッハー家の場では「帝国」や「皇帝」とは対立的に存在しているようで，良く分からないままであった．しかしシラーは意図的にそうしているのであり，このリュートリの場に至って，そして劇の進行とともに次第に，それが観客に，明らかにされて行く．舞台上の登場人物たちは「自分たち史」を学び，それにより自由承認状を認めた過去のフリードリッヒ皇帝と現在の「お上」を比べる物差しを初めて獲得し，「新しい領主」である「国王」アルブレヒトの資質を吟味できるようになる．男と女を比べるとき，同じ人間という物差しで測るように，過去と現在の「第一人者」としての資質を測るため，現在の「国王」を過去のフリードリッヒと同じ「皇帝」にしたのだろう．そして，このゲルトルートの台詞で興味深いのは，あの詩行にある「新しい領主」(dem neuen Fürsten) にわざわざ「家」(Haus) を付けていることであるが，これもシラーの意図的な準備で，これが実は後に大きな意味を持ってくる．私もここでは，観客席で初めてこの劇を楽しんでいる伯爵夫人に「実は後でね……」とシラーが囁かなかったように，また推理小説を読んでいる女学生に，「犯人は……」とちょっかいを出すような学生役を演じないために，その重要性を暗示するに止めておこう．だが一つ，観客はこの謎解きに誘われ，舞台に吸い込まれ，知らず知らずに，登場人物と共に学習させられている，このことだけは付け加えておきたい．

さて，この同じ場で，ゲルトルートの夫のシュタウフファッハーは古くからの「自由承認状」(Freiheitsbriefe, 311) が風前の灯火となり，自分の家が代官に没収される恐れのあることを語る．但し，それが誰からのものか，またその内容は何か，その妻が語っていた「古い皇帝の羊皮紙」と同一のものなのか，そういう気になる謎は残されたままで，観客は次の幕での展開へと誘われ，ようやくこの人民会議でそれが明らかにされる．この『テル』の約 100 年後，コナン・ド

イル（Conan Doyle 1859-1930）などによって，大衆推理小説のエポックが招来するが，このような謎解きの知的探求がすでに挿入されていたと言えよう．とにかく前述したように，第 1 幕でその夫は妻に励まされ，ウーリ州のヴァルター・フュルストを訪ね，そして第 2 幕の今，リュートリの会議で長老としての役を果たしているのである．

この自由承認状を暗示するもう一つのものが第 2 幕第 1 場にあった．若い貴族のルーデンツは，目の前の叔父アッティングハウゼン男爵も暗に含めて，オーストリアの皇帝に就くのに反対する者たちを非難して，こう言い放っていた．

あいつらを良い気分にしてくれるのは，主人の席に　　806
一緒に座ることなんです，あの尊いお方とね ― あの皇帝を
主人に頂きたいのは，主人というものを持たないためなんですよ．

この台詞は，主人を持ちたくないから，皇帝を主人として持ち，しかも一緒の席に座るということで，観客にとっては意味不明の矛盾でしかない．ところがルーデンツの叔父はこの言葉に対して烈火のごとく，「それをわしが聞かなければならんとは，しかもお前の口から！」(809) と，怒りを表していた．この台詞の意味内容，そして叔父の反応の激しさの原因，これが観客に良く理解できるようになるには，この第 2 幕第 2 場で「フリードリッヒ皇帝の書状」が出てくるまで待たなければならない．すなわち皇帝は二人いて，一人はオーストリアに領土を持ち，神聖ローマ帝国国王に選ばれ，シラーによって皇帝として舞台に挙げられているアルブレヒト，もう一人は男爵が「主人に頂きたい皇帝」で，「自由状」で自分と「一緒に座ること」を承認したが，今では過去の人となっている皇帝フリードリッヒである．ルーデンツに言わせれば，この亡くなった皇帝に執着する叔父は，自分で勝手に現皇帝を主人と認めないだけで，そのため新しい「国王」(dem königlichen Herrn, 815) に疎まれ，「裁判で農民と同じ席に座る」(819) はめになる，という訳である．

ところで，「ファーベンツの戦いに人民を率いて参戦」(910f.) してくれた男爵に[11]，普通そういう自由承認状は与えられるのであって[12]，決して農民たちにではないだろう．老齢のアッティングハウゼン男爵は，かつて彼が若いころ戦場で繰り広げた輝かしい活躍，それに感謝して文書で皇帝が認めてくれた平等という特権，これを若い甥に馬鹿にされたのだから，怒り心頭に発すのは当然である．ところで，この男爵の場ではそれらしい内容は引用で示したように，ほのめかされるだけで，その具体的文書名については一言もない．ところが前述したように，それとは逆に農民の場では妻ゲルトルートが「皇帝の古い羊皮紙」に言及し，そしてこのリュートリに集合した民会の場で，その文書の存在と内容が明らかにされるである．貴族の場と人民のそれで同じように，最高権力者の皇帝と平等である内容が描かれながら，それを保証する文書が人民の側に託されているということは，こちら側にシラーの思いが込められていると言えよう．

さてリュートリに場を戻すとして，その自由承認状の内容がシュタウフファッハーによって明

らかにされる．

主人なしでは（herrenlos），最も自由な人とは言えませんからね．
元首（Oberhaupt）はいなければなりません，最高の審判者はね．
争いに際しては正義を喜んでそこに託すのです．
ですから，私たちの祖先は昔からの荒れ地を
切り拓いてきた耕地のために　1220
その栄誉を，ドイツとイタリアの君主（Herrn）と
自ら名乗られる皇帝（Kaiser）に快く認め，
そして帝国の他の自由な人々と同じように
彼に対して，高貴な兵役には就くと誓ってきました．
これは自由な人の（der Freien）唯一の義務で，自分たちを　1225
守ってくれる帝国（Reich）を守るのは，当然なことですからね．
メルヒタール：それを越えたら，奴隷（Knecht）ということだ．
シュタウフファッハー：徴兵令が発せられると，ご先祖は帝国旗に
従って，自分たちの持ち場で戦い抜かれ，
武装してイタリアに向かって共に行軍され，　1230
彼の頭にローマの冠（Römerkron'）を戴かせたのです．
故郷に帰れば，楽しく自分たちで，昔からのしきたり（Brauch）と
自分たちの法（Gesetz）に従って治め（regierten），
最高の流血裁判だけが皇帝に任されました．
それには，この州に居城を持っていない　1235
偉い男爵が代理に定められ，
殺人罪ともなれば，こちらに呼んで来てもらい，
それで青天の下で，簡潔明快に，何びとをも
はばかることなく，判決を下したのです．これで，どこに
私たちが奴隷（Knechte）であるという痕跡があるでしょうか．　1240

最初の＜herrenlos＞の下線部は＜Herr＞の複数形で，この語には上は「神」から「男の人」や男性に対する敬称「～さん」という意味まであるが，この場ではまず「神」を，そして次に「皇帝」を指していよう．この皇帝が前出の「キリスト教徒の最高位の方」に相当し，神に代わってこの世で極刑の裁判を司る．そして人民はこの「皇帝」とどのような関係を結ぶことによって，最も自由になれるのかという問題が議論され，さらに自州のあり方を自ら決定する自治の問題が扱われている．自分たちの三州を外敵から守ってくれるから，国防という唯一の義務を果たし，守ってやる，そういう対等な相互関係に自分たちと「主人」である皇帝はある．「死刑」と

いう極刑だけは公明正大でなければならないから，外部の偉い人を呼ぶが，それ以外はすべて自治でやってきたから，自分たちは自由である．しかし，その一線を越えれば，「主人と奴隷」という主従関係になってしまう．この場のこのような内容は，まさにゲーテが催していた「サークル」などでフランス革命の推移を見ながら，ホッブス，ルソー，ヴォルテール，カントなどの啓蒙思想を参考にしながら議論されていたことであり，そしてドイツ国内の人間・階級関係とバラバラな領邦国家を統一する新しい体制についての意見交換の反映であろう．

シュタウフファッハーの叙事詩的な台詞はさらに続き，最高権力者への抵抗権にまで言及される．「皇帝が坊主の野郎のために，私たちの権利（Recht）をいい加減にし」(1245)，彼らの祖先たちの放牧地をアインジーデルンの教会に認めてしまったことで，「皇帝でも，私たちの所有地を他にやることはできないぞ．帝国の方から私たちの権利を拒絶するのなら，こちらから山にこもってでも，縁を切ってやるぞ」(1253f.）と，彼らの先祖たちは皇帝に迫ったのである．これまでは皇帝と国王の関係などが謎解きの対象とされ，そしてフリードリッヒという固有名詞の出現で過去と現在の皇帝の問題であることが明らかにされて来たが，ここからは皇帝が人民の権利を侵すという否定的側面を通して，その資質が問題とされて行く．皇帝なら何をしても良いという訳ではないのであって，彼らの祖先のこの言動は，自分たちの権利を守るための徹底抗戦であり，独立宣言にも繋がるものであろう．

ところが，自分たちの権利と自治をあのように守ってきた祖先たちの三州が，現在私たちの代になって，危機に瀕している．シュタウフファッハーは長老として，この歴史を知らない若者たちもいる会議参加者にこう訴える．

―― そう私たちの祖先は言ったのですぞ．その私たちが
新手の軛に繋がれ，恥辱を受けていて良いでしょうか．
皇帝の力（Macht）でもできなかったことを
よそ者の家来（fremden Knecht）に受けても，忍ぶべきでしょうか．
―― 私たちはこの土地を，手に汗して，私たちのために　1260
創造したのです．かつては熊の住み家で，未開だった
昔の森を，人間の住める環境に変えてきたのです．

「よそ者」とはこの三州の外にあるオーストリア，すなわちそこに領土を持つ領主アルブレヒトのことで，その彼が新たにこの三州に派遣した代官ゲスラーたちが，その「家来」になる．その国王と代官との主従関係は，前述したように「主人と奴隷・家来」の関係で，お上の意思に従う代官たちと違い，シュタウフファッハーたちは自分たちの「手」で，自分たちのために「創造」してきた，自分たちの土地で，自治をしているのだから，「自由人」だ，という訳である．数詩行にわたって，彼ら先祖たちの苦難に満ちた開墾史が語られ，その長老の台詞はこう続く．

この土地は千年にわたって所有している私たちの　1270
ものです．―― よその主人の家来（Herrenknecht）が勝手に
やって来て，私たちを縛る鎖を作り，恥辱を加えるのを
この私たち自身の地で，許しておいて良いでしょうか．
このような圧迫に対抗する手段（Hülfe）は何もないでしょうか？
（農民たちに，がやがやと動きが起こる）
いや，圧政者の力（Tyrannenmacht）にも限界（Grenze）があります．　1275

聴衆は自分たちの歴史を学び，それを踏まえ，現状を変革する手段を隣の者と話し合い出し，その頃合いを見はかって，シュタウフファッハーは「圧政者」の力をこのまま許しておいてはいけない，と訴えている．この原語の ＜Tyrannen＞ をそう訳したが，これは「国王」とか「皇帝」を指しているのではなく，きこりバォムガルテンの妻を凌辱し，農民メルヒタールの家畜を自分たちの食料に徴用し，竿の上に掲げた帽子に低頭させようとする代官ゲスラーたちを指している[13]．「皇帝」の ＜Knecht＞ でしかない代官たちが，傍若無人の「力」(Macht) を「自由人」に振るっている，こいつらを三州の境界（Grenze）の外に追い出そう，というのが彼の提案である．そして，その手段をこう提案する．

虐げられた者が権利の保障（Recht）をどこにも頼めぬとき，
圧政が耐えがたきものになったとき，天を頼みに，
勇気をふるい起こし，手を空高くかかげ，
そこで星のごとく不滅に輝く，
譲り渡すことのできない，永遠の　1280
権利（Rechte）を引き下ろします ――
人間と人間が対峙する，原始の自然
状態（der alte Urstand der Natur）に戻っているのです ――
もう他にどうしようもない状況に追いつめられた
私たちに残された希望と手段は，剣に託すしかないのです ――　1285
私たちは暴力（Gegen Gewalt）に対抗して，最高の宝なら
守って良いのです，州（くに）（Land）[14] のために立つのだ，
妻と子供たちのために立つのだ！

「譲り渡すことのできない」権利を否定する「力」(Macht) の「暴力」(Gewalt) には剣を取って対抗する，この手段を天は認めている．そして男たちはその権利を守るため，自分たちの州と妻と子供を守り，そして自分たちの祖先が守り，自分たちが引き継いだ州と権利を愛する妻と子供たちに託すのである．この引用最後の 2 詩行は第 3 幕第 3 場と関係してくるのだが，この拙訳

ではそれが不明確になる恐れがあるため，どのように「立つ」のかを原文で補っておきたい．＜Gegen Gewalt —— Wir stehen vor unser Land, Wir stehen vor unsre Weiber, unsre Kinder＞，この原文で問題なのは，＜stehen＞ と ＜vor＞ である．前者は「立っている」と普通訳されるが，それはそれで正しい．ザンダースの 1878 年版の辞書でも，この語の基本的な意味を「最小の平面上に真っすぐ立って，停止している」[15] としている．しかし「〜の前」を表す前置詞 ＜vor＞ が ＜stehen＞ という静止を表わす動詞と結びつく場合は普通 3 格をとる．しかしここでは，例えば ＜unsre Kinder＞ と，4 格を取っているため，場所の移動とか運動を表し，「子供に対して暴力をふるう者と子供の間に割って入り，子供の前に立って，停止している」となる．そういう意味で，人民は「子供たちのために立つのだ」から，州や妻，そして子供を守るための防壁になるのであって，自衛である．その状態はもちろん，「子供を背に，敵を前にして立つ」である．それゆえスイス三州の人民にとって，「州の前に立って」守るということは，侵略してきた外敵を追い出す独立戦争後の自衛である．

独立・自衛とはいえ，この引用詩行で議論になっているのは，抵抗・革命権の問題である．ルソーは「人間は生まれながれにして自由」で，その「自然に帰れ」と説き，その人間同士の原始的で野蛮な殺し合いを止めるため，その至上な「権利」を主権者に譲り渡すという『社会契約』によって，人間らしい社会を創造し，その権利委譲後はその主権者を否定することはできないとしたが，ホッブスはその主権者がその社会の秩序を保証できなくなった時には「抵抗権」を承認した．シラーは，自治制の下で平和に暮らす「自由人」が，それ以前の「原始的状態」の「暴力」にさらされている状況下では，一方ではカントの説いた倫理をテルに実践させ[16]，他方ではホッブスが承認した抵抗権を人民に認め，その事業の達成後は再びルソーの「自然に帰」ろうと，舞台上のシュタウフファッハーの口を通して，観客にも説いていると言えよう．

このようにリュートリ民会の参加者たちは「自由承認状」と，千年にもわたる国造りの歴史を学び，同胞であることを再確認し，自分たちの権利に目覚め，シュタウフファッハーの呼びかけに興奮して剣を打ち合いながら，「妻を守るために，子供たちのために立つのだ」(1289) と叫ぶ．その興奮の渦の中に牧師レッセルマンは進み出て，こう切り出す．

剣を取る前に，こういう手も考えなさい．　1290
あんた方は皇帝（Kaiser）と平和裏に折り合えましょう．
それには一言だけで済むのですよ，それで今はひどいことを
している圧政者（Tyrannen）たちも，あんた方におもねってきますよ．
—— 向こうがあんた方に出してきた案を呑み，
帝国から離れ，オーストリアの主権を認めなさい ——　1295

ここでは「皇帝」と「オーストリア」の二つが出てくるが，これで見事に皇帝の資質が問題とされている．アルブレヒトという同一人物が「皇帝」の冠を載せているが，その本質は「オース

トリア」の領主で，その彼がスイスに代官として「圧政者たち」を送り込んできたのであり，この三州の自治を覆している張本人でもある．そのような「皇帝」と「折り合う」ということは，自治と自由民の地位を捨て，「奴隷」(Sklaven, 1302) になるということである．自分たちの歴史を学んだ州民は口々に，「オーストリア」側に就くことを拒否し，そんなことを言い出すものは「裏切り者だ」(Verräther, 1297) とまで罵り，この新しい州法 (Gesetz, 1310) の第 1 条を「オーストリアへの服従を口にする奴からは，スイス人の権利を剥奪する」(1303ff.) と規定することが，全員賛成で決まる．ここから，「我ら先祖と同じように自由であらん，奴隷として (in der Knechtschft) 生きるより，むしろ死を」(1450f.) というリュートリの誓いが生まれる．

これまでもオーストリアという地名は皇帝や帝国と対立的に使われ，全幕では 22 回出てくるが，レッセルマンの台詞の第 1295 詩行から 1312 までの 18 詩行だけで，州民の憎悪の的として 5 回も立て続けに出てくる．これは次の第二の叙事詩的台詞と関係していよう．シュタウフファッハーが過去の歴史を語ったのに対し，コンラート・フンは自由承認状の現在史を語り，ここに集まった三州の代議員に自分たちの置かれている状況を，こう伝える．彼は代官たちの圧政を直訴し，さらに新しい国王が皆これまで承認してくれたように，「我々の自由の文書を受け取りに」(1326f.) 皇帝の居城に出かけた．他の地域の者たちが自分たちのそれを国王からもらい，喜んで帰って行くのに，彼には会うことさえ許されず，「皇帝 (Kaiser) は今回その暇を持ち合わせておられない」(1334) と追い返される．彼が肩を落として城中で帰途についていると，同じように要求をはねつけられた王族に呼び止められる．シュヴァーベンのヨハン公が，成年になったので，母方の遺産である領土と領民を返してもらいたいと頼んだが，その彼の頭に国王は小さな花輪を載せて，「これが若いのに似合いの飾りだ」(1348) と，自分の甥の財産さえ横領しているのだから，お前たちは「自分たちで自助努力するのだ，国王 (König) から正義を期待するな」(1340f.) と忠告される．こういう内容の 15 詩行にも及ぶ叙事詩的で生き生きした語り口により，集会参加者は武装蜂起という自助手段を一致して選び，その具体化へと議題は移ってゆく．

ところで普通そういうことになれば，皇帝の不正に対して「山にこもって戦うぞ」と迫った先祖たちの例に倣って，自由承認状の自治を反故にしようと，その再交付を拒む悪の根源である「皇帝」に対して蜂起することになろう．ところが，この『テル』ではそうならない．「1.」のダールベルクへの献詩にあるように，隣国のフランスのように国王をギロチンにかけ，ジャコバンやジロンド党派間の殺し合い，内戦 (Bürgerkrieg) 状態にまでなるという，そういう形ではないものをシラーは考えていたからであろう．人民の敵は「オーストリア」であり，さらにその帽子への拝跪を命令する代官ゲスラーたちに限定され，皇帝についてはその資質問題として展開されることになる．

そのため三州の人々は「賢く喜ばしき決着を見るために」(1352)，「カイザーのものは，カイザーにとどめ，主人を戴く者は義務に従って仕え」(1357) 続けるのであって，これでは身分差別は残ってしまうが，そういう「やむをえないことは，そのままにして」(1366)，蜂起の目的は「代官たちをその家来もろとも追い出し，その堅固な城砦を壊す」(1367f.) ことに限定される．

しかも「無血で」(1369) という条件付きで，それをやり遂げよう，となる．そうなれば，「私たちが畏敬の念という敬虔な義務を投げ捨てたのは，止むに止まれずのことだと思われ，私たちが範を越えないのをご覧になれば」(1369ff.)，皇帝は「政治的深慮から」(staatsklug, 1373) 己の怒りを抑えられるだろう．これは人民側からの勝手な楽観論であると言えるが，後者の台詞はフランス革命の推移を背景にしたシラーの，舞台上からの，ドイツの君主たちに対する新しい国創りへの呼びかけで，そしてドイツ人民に対する「無血で」理性的な国創りへの参加要請であろう．

舞台の上では武装蜂起が具体化され，その目標は代官たちのロスベルクとザルネンの二つの城とアルトドルフの「ツヴィング・ウーリ」要塞を落とすこと，その決行日については即刻と後日の二案で討議され，土地の者が貢物を城内に届ける慣わしとなっている「主の日」(das Fest des Herrn, 1400)，すなわちクリスマスが攻撃に適しているとして，12 対 20 の賛成多数でその日まで延期と決まる．最大の難問として残ったのが，いつも多数の武装した護衛を引き連れている代官ゲスラーを誰が，どのようにやるかということであったが，これは未決のままで会議は終わり，リュートリの誓いは，「我ら最高の神におまかせし，人間の権力は恐れないことにしよう」(1452 f.)，これで閉められる．その日まで各人は敵に計画を察知されないよう仲間を集め，個人的な正当な怒りでも抑えて，復讐は全体のために取って置くようにと，シュタウフファッハーは呼びかけ，最後をこう結ぶ．

> 己のことといって（in seiner Sache)，自力で乗り切ろう（sich hilft）とする者は
> 共同の財を（am allgemeinen Gut）損なうことになるのですからな．　1465

こうしてリュートリに集まった三州の代表は自分たちの歴史を学ぶことにより，お互いが同じ由来で結ばれた一つの民族であり，兄弟であることを知り，これまでの自州と他州，さらに自分と他人という，よそよそしく（fremd）疎遠だった関係を克服した．さらに自由承認状の存在とその内容，そしてその現況を知らされ，自治と自由の内容は権力との絶えざる戦いのなかで決まることを学び，現「皇帝」の資質を疑問視しながら，オーストリアから派遣された代官たちを州外に追い払い，かつての自治を回復するという「共通の件」のため私事を捨て，「統一」して立ち上がることを誓い合った．ここまで彼らは成長したのである．ヴァイマル侯も含め，観客は自らの身分・地位に応じて，それぞれ学習をしたであろうし，最後の場で幕が下りるまで，それを続けるだろう．

農民と貴族の同盟の行方は？

三州人民同士の一致はこのリュートリの集会で出来あがったが，同じ地に生活している者として，かつてのローマ遠征では共に戦った貴族と農民の同盟が今では危機に瀕している．三州の地

に人民と共に根を張ってきた貴族の中には，新興勢力のオーストリア側に走る者が出ている．バォムガルテンに斧で撃ち殺されたあの代官「ヴォルフェンシーセンもその成れ」(945f.) の果てだった．舞台上ではこの土地生え抜きの若い貴族ルーデンツと叔父のアッティングハウゼン男爵の間で，リュートリでの人民の会議で問題になっていたのと同じこと，すなわち帝国に固執するのか，それともオーストリア側に屈伏するかが争われ，男爵はこういさめる．

―― あちらに行って，お前の自由な魂を売れ，
この地を封土としてもらい，領主の家来（Fürstenknecht）となれ，　855
お前自身の遺産とこの自由な土地に残れば，
自分自身が主人（Selbstherr）で，領主（Fürst）であることができるのだがな．

最初の「領主」はオーストリアにいる国王のことであろう．その王に自分の自由な遺産と土地を差出し，それを再び国王から封土としてもらう，すなわちそれを安堵してもらうということで，その土地の自由な領主としての身分を捨て，彼の「家来」になり，シュヴィーツとウーリ州の代官ゲスラーの下で働くということである．その叔父に対して，ルーデンツはこう反論する．

私たちが国王（König）に逆らっても無駄なことですよ，
世界は彼のものなんですからね．私たちだけで　870
強情を張り，意固地になって，
私たち三州の周りにずっと張り
めぐらされた鎖を断ち切ろうとでもするのですか．
市場は王のもの，裁判所も彼のもの，
商業街道も彼のもの，そしてゴットハルト峠を　875
通るロバも馬も税金を払わねばなりません．

人民の場では砦づくりの賦役に駆り出されたり，妻を凌辱されそうになったり，そして牛を徴用されたりなど，これらは個人に対する具体的な攻撃であったが，貴族の場ではこのように司法と経済という政治的・抽象的問題が前面に出てくる．他州はすべてオーストリアの軍門に下り，自分たち三州は包囲され，孤立しているのだから，どうしようもない，これがルーデンツの反論である．ルツェルン市からシュヴィーツ州のシュタウフファッハーを訪れたプファイファーは，帝国に踏みとどまり，オーストリアには付かないようにと忠告しただけで，その市がどのような状況になっているかは，彼の台詞からカットされていたが，この場でアッティングハウゼンの甥に対する反駁として，こう紹介される．

―― ルツェルンに行く船で下って，そこで聞いてみろ，

いかにオーストリアの支配がその地方を圧していることか．
あいつらが来れば，わしらの羊や牛を数え上げ，
わしらのアルプスを測量し，わしら共用の（freien）森の
鳥も獣も追い出して，そこから切り出した大木で　900
わしらの橋という橋，町の門という門を塞ぎ，こうして
わしらを貧困にしたその金で，土地という土地を買い占め，
わしらの血税で戦費を賄うことになろう ――

これまで自由であったこの地にオーストリアの侵攻を許せば，彼らに通行税など新たな税金を色々科され，自分たち貴族も農民も共に貧乏にされ，その税金で土地を買い占められたり，新たな他国との戦争に使われて，彼らの領土拡大という野望に加担することになる．それより自治と自由を守り，主人として農奴と仲良く共に平和に暮らしてして行く方が良い，これが老男爵の考えであり，人となりである[17]．若いルーデンツは州民を「軽蔑の眼で見下し」(782)，前述したように，法廷の場では彼らと同列の席に着くのを嫌がり，時流に乗って出世し，代官屋敷にいる美しい娘ベルタを自分のものにしたいという下心がある．彼は前述の時流分析をこう続ける．

―― 帝国が私たちを守ってくれるでしょうか．帝国は強大化する
オーストリアの力（Gewalt）に抗して自らさえ守れないのでは？　880
神さえ私たちを助けてくれないのに，そんなことが皇帝にできる訳はない．
歴代皇帝の言葉（der Kaiser Wort）に何の価値があるのですか．
財政の，そして戦争の危機となると，
鷲の紋章の庇護を求めて逃げ込んできた町や村を，
皇帝は担保にしたり，譲渡しても良いのですよ．　885
―― そうでしょう，叔父上．このような分裂という
厳しい時代では，強大な元首につくことこそが
良き行為であり，賢い用心というものです．
皇帝の冠は種族から種族へと移って行きますが，
その冠は忠勤のことなんか覚えていてくれませんよ．　890
ところが強力な世襲君主のためによく尽くすということは
将来ずっと続く収穫への種まきのようなものですよ．

「歴代皇帝の言葉」は自由承認状のことも暗に指しているのだろう．「分裂という厳しい時代」は，前述したように，ここでは小国王時代のことで，選挙のたびに次々変わって行く弱小の国王では，オーストリアのような広大な領地を持つ，強力なハープスブルク家の君主にはとても対抗できず，皇帝の自由承認状など反故同然であるから，強力な世襲君主に付いた方が将来の保障に

なる，これがルーデンツの考えである．この彼の台詞を通して，庇護を求めてきた都市などを譲渡したり，三州に認めてきた自治を自己の利益のために勝手に破棄するなど，こういう皇帝の否定的面が明らかにされることによって，逆に全体としての帝国とその部分としての各州との有るべき関係が問題として提示されている．ところで，この場でも帝国とオーストリアの対立が描かれているように見えるが，前述したように，この劇では皇帝もオーストリアの領主も同一人物アルブレヒトである．そして，これは皇帝の資質問題として劇の進行と共に次第に明らかになって行く．ところで，この叔父と甥の論争はこのような政治・経済という大きな問題だけにとどまらず，個人的には，これまで通り人民の中に止まり，農奴の指導者として彼らと共に故郷の自由と自治を守るか，それともそれを裏切って，外の強い権力者に付き，その家来・奴隷となって人民の弾圧と搾取に精を出し，出世し，自分の惚れこんだ騎士の娘を獲得するのか，そういう問題も含んでいる．この地生え抜きの貴族たちはそのどちらを選択するかで迷っていると言えよう．

そういう貴族を人民の側はどう見ているのか．長老のヴァルター・フュルストはアッティングハウゼンを指導者として慕い，自分たちの「相談相手になってもらおう」(Vgl. 684f.) と提案するが，若いメルヒタールは「貴族がどうして必要でしょうか．私たちだけでやり遂げましょう」(693) と，農民単独の蜂起を主張する．その二人をとりなすようにシュタウフファッハーはこう言う．

貴族たちは私達と同じ危機にまだ直面していず，
洪水は低い所で暴れ狂っているが，
今のところ高い所にまで届いていないだけで，――
しかし，州中が武器を取っているのを見れば，その時は
私たちを彼らが助けないということはないでしょう．　700

中間層である地元の貴族の大方は模様眺めという状況である．舞台の上では，古き良き時代の慣習をも葬ろうと，外部勢力のオーストリアは横暴の限りを尽くす．これに業を煮やしているが，老齢で気ばかり焦っているアッティングハウゼンが一方に，そして美しい娘ベルタを得るために出世しようと支配者側に走るルーデンツが他方に，そういう設定で，老若の貴族の対立が演じられていたが，リュートリの民会では貴族との同盟は話題にも上らなかった．

この同盟を結ぶ契機をつくるのがその娘ベルタで，ルーデンツに本来の騎士の任務を自覚させ，悔い改めさせ，人民の側につかせる．ところで，この彼は聖書の帰ってきた息子という重要な役も演ずることになるのだが，それが美しい感動的な言葉で包まれているにしても，理念と論理に偏重しているため，アリストーテレスの要請した「蓋然性」が文学的に十分形象化されているかと言うと，肯首しかねる．それはともかくとして，第 3 幕第 2 場で，二人だけになった偶然を利用して，ルーデンツはベルタに愛を告白し，彼女の方もその機会を利用して，彼に好意を寄せていると同時に，憎み，軽蔑していることを知らせる．彼女は「傲慢な騎士たちの陰気な城」

(Vgl. 1719f.) より，「とても謙虚で，それなのに力強い」(1620)，自然の中で働く人民を愛しているので，その彼らを守るという本来の騎士としての任務を果すよう彼に迫る．そして，それこそが二人の結婚を現実のものにする保障であることを，こう説く．

ヴァルトシュテッテンに私の領地はあるのですが，
スイス人が自由になれば，私もそうなるのですわ．　1660
オーストリアのひいきで私を得ようと思わないでね．　1662
私の小さな相続地に彼らは手を伸ばし，
それを自分の大きな土地と一緒にしようとしているのですわ．
それと同じ領土拡張の強欲があなたの自由を侵し，　1665
私の自由をも脅かしているのです．
―― ああ，あなた，私は生贄に選ばれて，オーストリアの
お追従者に報酬として与えられることになっているのですわ ――
虚偽と陰謀の渦巻く，あの皇帝の城（Kaisershof）に，
そこに私を引っぱって行って，ぞっとするような　1670
婚姻の鎖に繋ごうと，あちらで私を待っているのですわ．
ほんとの愛だけが，―― あなたの愛こそが私を救えるの．

ベルタの領地は三州のヴァルトシュテッテンにあるが，現在は若い貴族をおびき寄せるおとりとして，アルトドルフの代官ゲスラーの館に遣わされている．彼女を求める男たちはその相続地が目当てで，彼女はそういう政略結婚に利用されるか，またはまもなく皇帝の城に移され，オーストリアのお気に入りに遣わされる運命にあるという．この恋人たちの私的な婚姻の自由はそういう政略結婚と，皇帝のスイス三州への領土拡大政策とによって阻まれている．それ故この小さな私的な恋が全体と，すなわちオーストリアという外部権力を州外に追い出し，自治を回復し，人民を解放するという歴史的な大事と結びつくのである．しかしルーデンツはすでにオーストリアに誓いを立て，オーストリアの奴隷（Sklave, 1604）となってしまっている．

ルーデンツ：救いようのない馬鹿だ，僕という奴は．―― 自分で
　縛ってしまったこの首から，この縄をどうしたら外せるのか？
ベルタ：そんなもの男らしい決断（Entschluß）で，お切りなさい！　1725

イマーヌエル・カント（Immanuel Kant 1724-1804）は『啓蒙とは何か，という問いに答えて』(Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung? 1785) で，人間が未成年状態にある原因を「他人の指導なしで悟性を使うという決心（Entschließung）と勇気（Mut）が欠けていること」とし，ホラーツの言葉，＜Sapere aude!＞（敢えて賢くあれ）を引いて，「自分自身の悟

性を使う勇気を持て，これが啓蒙のスローガンだ」[18] と書いている．シラーはもちろんこれを読み，このベルタの台詞にそれを利用していると言えよう．オーストリアの奴隷（Sklave）になり下がり，上の命令に従うことしかできない家来（Knecht）に，自らの意思でなってしまったルーデンツをベルタは，カントの「勇気」という名詞を「男らしい」(männlich）という形容詞に変えて，本来の自由人に戻るよう「啓蒙」している．

ところが，この彼がベルタと共に依然としてゲスラーの家来のままで，次の第 3 場に登場するのである．これは代官ゲスラーが父親テルに子供の頭上のリンゴを射させる場であり，ここにリュートリの主だった参加者も登場し，これまでバラバラであった様々な筋をこの一点に集中させる重要な場である．そのためには「男らしい決断」の多少の遅れという欠陥は許されるのであろう．実際ヴァイマルでの初演も，その後の色々な都市での上演でも，観客は拍手喝采で，大成功であった．

人民側の筋は若いメルヒタールと長老二人の第 1 幕第 4 場で，代官たちの暴政にまだ静かに耐えるのか，それとも今立ち上がる準備会議開催に移るべきかが議論され，第 2 幕第 1 場のリュートリでは，人民は成長し，団結し，オーストリア側に付く奴からは市民権を剥奪すること，そしてこの蜂起のことは敵に察知されないように注意して，秘密裏に仲間を集めることが相談された．そして蜂起の日をいつにするかで，「余りぐずぐずしていると，あのツヴィング砦が完成してしまう」(1391）から即刻という案と，今ある二つの砦を最も攻め易い「州のお祭りまで延期する」(1400）案とが激しく議論され，挙手で「20 対 12 の多数」(1419）で後者に決着した．貴族側の筋は，先述したように，老若の間で故郷と人民のもとに留まるか，それを捨て敵側に乗り換えるかが争われ，ベルタとルーデンツの場では彼女の真意を知らされ，彼はこれまでの自らを悔い，翻意していた．テルは「1.」で述べたように，カントの定言的命令を地で行き，困っている人を助け，弓の修繕を頼む息子には，「一人前の射手は自分でやる（sich hilft）ものだ」(1479）と，自助を促し，お祖父さんの家を訪れる道中では，人間同士の信頼と自由の尊さを教え，お上への恭順を植え付けようとするあの帽子の前では素通りして，個人の尊厳を守るよう促す．それを帽子の番人に咎められ，この第 3 幕第 3 場で三つの筋が交差する．

この三つの筋を集中させ転換させるものは，父親のテルに 80 歩離れた所に立っている息子ヴァルターの頭上に乗せたリンゴを射落とせという，代官ゲスラーの命令である．父親のテルは「何という途方もないことを」(Welches Ungeheure, 1890）と，このような人情に反する命令に感嘆文で抗議するが，これこそ前述したあのメルヒタールの父親から目をえぐり出すということをはるかに超える「最悪のこと」(das Aeuserste, 640）として，シラーはこの場に設定したと言えよう．メルヒタールの件は農民たちをリュートリの統一へと促したが，そこでの決定をこのテルの件は覆し，劇の全体の筋を転回させる．メルヒタールは「こんな惨いことを俺たちの目の前でやらせておいて良いのか．何のために俺たちは誓ったんだ」(1966f.）と，周りに集まってきた農民たちを扇動する．これに対して長老のシュタウフファッハーは「無駄はよせ．わしたちは武器を持っていないし，周りを槍の森に囲まれている」(1968f.）と制止するが，若者の方は

「すぐ実行しておけば良かった．あのとき延期を言い出した奴がいけないんだ」(1970f.) と悔やむ．リュートリでは「妻と子供たちのために立つ」(1289) と誓い合った．前述したように，テルも確かに息子の前に立っているが，人民たちの誓いとは向きが逆で，人情に反したその命令に固執する代官を背に，子供に向かって弓を引き絞らなければならない．リュートリでは人民同士は「兄弟」のようであろう，人間の権力を恐れず自由であろうと誓ったが，これまで皆を助け，皆に頼りにされている味方のテルが代官に「そのリンゴを射ろ」と強いられているのを，他人事のように傍観するしかない．長老のヴァルター・フュルストはテルの妻の父であり，的となるリンゴを頭に載せる子供は孫にあたるため，代官の前に膝をつき，「私の財産の半分を，いえ全部をお取りくださって，父親にこんな恐ろしいことをさせないで下さいませ」(1944ff.) と哀願し，農民の女たちは「天にまします神よ」(1983) と祈る．これがこういう状況では物理的に何もできない人民たちの反応である．しかし，各人の胸の内では大きな転換が起こっている筈である．

貴族の側はどうであろうか．ゲスラーに付き従ってきたベルタはテルをかばおうと，「この可哀そうな人たちに，冗談はおやめになって，ご主人様．ご覧なさいませ，真っ青になって，震えていますわ」(1910f.) と取りなすが，逆にゲスラーは増長し，武装した多数の家来に守られて，自分が安全な状態にあるこの時とばかりに，これまで恐れていたテルをなぶり者にして，こう言う．

ゲスラー：*(テルに)* さあ，やれ．武器を持ち歩いても，使わねばな．
　人を殺める飛び道具を持つとは，危ないものでな，
　矢は射手に跳ね返ってくるものだ．
　農民の分際で勝手にそんな権利を自慢しているとは　1975
　この州最高位の者を侮るに等しいぞ．
　命令する立場の者以外，誰も武装などしてはならぬ．
　弓矢を持ち歩くのが，そんなに嬉しいなら，
　よし，わしの方からお前にその的を決めてやろうと言うのだ．
テル：(弓を引き絞り，矢をつがえて)
　道を開けてくれ，どいてくれ．　1980

そうテルは言って，息子の頭上の的をねらうが，手はブルブル，膝はガクガク震え，目の前はチラチラするという状態である．彼は構えていた弓を下ろして，胸をはだけ，代官に自分を突き刺してくれと頼む．

ゲスラー：お前の命などいらんわ，射るのが所望だ．　1986
　―― お前は何でもできるのだろう，テル，何にも臆さないのがお前だ，
　舵も，弓も，お茶の子さいさいだろう，

他人を助けてやる場合なら，どんな嵐にも怖気づかない，
今は神がお前を助ける時だ ― お前に皆を助けろとな！　1990

80 歩離れた向こうの菩提樹の下に立っている子供のヴァルターは，父の腕を信じ切っているため，「とうちゃん，射って！ぼくはこわかぁないよ」と催促する．テルは「やるしかない」(Es muß!, 1991) と，短く言って，力を振り絞り，弓を構える．この場には一方では，テルにとっては緊張の極限を通り越した静かな時間が，他方では代官に哀願する人民の声，彼らを押し止め，代官から引き離そうとする武装した多数の家来の怒声，そして次に述べるが，一人の騎士の代官にたいする抗議の厳しい声，この静と動の両極が舞台上にある．このテルの「やるしかない」という，たった 2 音節の台詞について，カントなどとの関係では「1.」で論じたので，ここでは人民の筋との関係で見てみよう．

前述したように，オーストリアという外国の支配勢力を州外に追い出すという目的を達成するために，全員で彼らは誓いをたてた．そして，それを保障するためにシュタウフファッハーはこう注意を促した，「己のことといって，自力で乗り切ろう（sich hilft）とする者は，共同の財を損なうことに」ならないよう，隠忍自重しろ．これは，全体のために個人を犠牲に，と言うことになろう．ところが，これまで述べてきたように，テルは「自分のことは自分で」という自助 (sich helfen) 精神に満ちた，自立した個人で，そして困っている「他人を自分のこととして」(Vgl. 2529) 助ける「定言的命令」を地で行く啓蒙主義の権化である．こういうテルを妻は評して，「あなたは良い人（gut）で，助けになる人（hilfreich）で，皆の役に立つお人よ．でも，あなたが本当に困ったとき，誰もあなたを助けてくれませんよ」(1533f.)，これに対してテルは「俺が助けを必要としないよう，神が守ってくださる」(1535) と応えていた．まさにこれと同じ内容が，先ほど引用した，ゲスラーのテルをなぶり者にした言葉（1989-90）である．テルは他人を助けてきたが，今は自助しなければならない．ゲスラーの最後の台詞，1990 詩行の原文は＜Jetzt Retter hilft dir selbst ―― du rettest alle!＞ で，定冠詞付きでないため ＜Retter＞ は「神」としか訳せないが，前後関係から，他人を助けるときは自らの意思で，喜んで舵を取って嵐の中に漕ぎだしたテル自身をも指している．そして次の「助けろ」(rettest) は要求話法で，神のテルに対する「要求」であるが，同時にゲスラーのそれでもある．彼のここの台詞 1986 詩行は「射るのが所望だ」(Ich will den Schuß) という彼の意思で始まり，最後のここでは「他人はもう良い，今は自分を助けてみろ，それで初めて皆を助けることになるのだ」と，神と自分を重ねてテルに要求し，子供に向かって射るよう強制している．これほど神に対して不遜で，おごり高ぶり，人をなぶり者にする非人間的な言葉もないであろう[19]．テルは人民の一人であるが，その全体は何もできず，自分も含めた全体のための「無血で」という人民の一斉蜂起を保障するためには，子どもの「無血で」リンゴを「射る」という自助しかない．これが神の要求であり，ゲスラーの強制でもある．こういう事態すべてを含んだものが ＜es＞ であり，それが「強いる」(muß) という必然的状況で，それを打開するテルの決意を表す言葉がたった 2 音節の「エス・

ムス」である．これに居たたまれず，ルーデンツは代官にこう抗議する．

国王（König）の名誉は私にとって神聖ですが，
このような統治では憎しみを買うばかりです．
それは国王のご意思ではない —— 敢えて言わせて　2000
もらいますが，私の民にこんな残忍な仕打ちとは
不当ですし，そんな代理権など，あなたにはない．
（中略）
これ以上黙っているのは，私の祖州にも，　2008
皇帝（Kaiser）にも裏切り行為となりましょう．
（中略）
私は民を捨て，自分の血縁も　2011
思い切り，自然のあらゆる絆も
断ち切ってきたが，それはあなたに与するためでした ——
それが万人のための最善を促進すると私は信じて，
皇帝の権力の強化に努めてきました ——　2015
今ようやく目からうろこが落ちました —— あなたに連れられ
奈落のふちにまで来てしまったことを知り，ぞっとしています ——
私の捉われない判断力を，あなたは間違った方向に導き，
私の正直な心を，惑わしてきたのです．—— 私は最善と思って，
私の民をすんでの事で，滅ぼすところでした．　2020
ゲスラー：主人に対して，よくもそんな言をシャアシャアと！
ルーデンツ：皇帝が私の主人で，あなたではない

ルーデンツはこの台詞でようやく「男らしく」ゲスラーの家来であった自分と決別し，精神的な自由を取り戻す．ところで，ベルタの以前の運命は「皇帝の城」に引っ張って行かれ，そこで政略結婚の犠牲になるのであったが，それをルーデンツは既に彼女の口から聞かされていたのにもかかわらず，この台詞での皇帝はゲスラーの陰に隠されるというより，美化されているように見える．しかしこの劇全体から見れば，問題の本質はリュートリの場と同じように，国王や皇帝の資質が問われていると思われる．すなわち，この代官を派遣したオーストリアの領主も，帝国の国王も皇帝も同一人物アルブレヒトで，その彼が本来の皇帝だったら，ゲスラーのこのような統治は許されないであろうということ，これが彼にこの台詞を話させるシラーの真意であろう．そもそもシラーの時代には多数の分裂した領邦国家しかなく，それを統一した頂点に立つ者として皇帝が必要だったのであり，その資質がシラーにとって最大の問題であったのではないだろうか．あの水曜日の「サークル」を主催していたゲーテは「進歩的な貴族と市民の協調により社会

変革が可能」[20] と確信していたのであり，シラーもその点で一致し，ここにそういう貴族としてルーデンツを登場させ，貴族と農民の同盟へと向かう契機をこのように創作したと考えられる．

劇の筋の進行に戻るとして，あのようにルーデンツが代官に食ってかかっていると，「リンゴが落ちたぞ」(2031) という叫びが起こり，事態は新局面に移る．テルは隠した二の矢の意味をゲスラーに問われ，第一の矢が誤って子供に当たってしまった時には，この矢であなたを射るつもりだったと，正直に話してしまい，捕えられ，州外のキュスナハトに連行されることになる．これに農民たちが，「それは許されねえ，皇帝にだってできない，俺たちの自由承認状に反するぞ」と抗議すると，ゲスラーは，「そんなものどこにある．皇帝はそれをお認めになったか？お認めになっておらんぞ ―― そういう恩寵はな，服従することによってようやく賜るものなのだ」と逆襲する．こういう否定的面から，皇帝は勝手に州民を拉致してはいけないと言うことが，自治の権利内容として明らかにされる．こうして農民たちが頼りにしていたテルは捕えられ，一斉蜂起の期日をクリスマスにまで延期した決定は皆に疑問視され，貴族のルーデンツは代官と袂を分かつ方向に急転する．

「テルは手枷をはめられ，代官の手中に」(2109)，「高貴な旦那，アッティングハウゼンは死の淵に」(2114f.) という事態に直面した人民たちは，慕っていた彼の最後を看取ろうとしてか，この老貴族の館にあの子供のヴァルターも連れて，皆で集まっている．そこにテルの妻，ヴァルターの母で，ヴァルター・フュルストの娘であるヘートヴィッヒが駆けつけてくる．彼女はまず子供の無事を確かめると，「お前に矢を向けるなんて，どうして父親にそんなことができたのでしょう」(2314f.) と，母親と女性の立場から周りの男たちを批判し，当時の必然的状況を皆に説明され，さらにバォムガルテンから，「ご主人に降りかかった運命はとても厳しいものだったのですから，彼に激しい非難を浴びせるのはもうおやめになって，彼の味わった苦しみを分かってあげてください」(2333ff.) と言われると，彼の方に向き直り，「あなたはあの人の不幸に涙を流すだけですか」(2336) と食ってかかり，テルは嵐の湖に漕ぎだして，あんたを救ってくれたのに，あんた方は目の前で味方の彼が引かれて行くのを傍観していただけではないかと批判する．それに対して彼女の父が「助けようにも私たちに何ができたと言うのかね，こちらは小勢で，武器もなしだったのだよ」，そうたしなめると，彼女は父の胸にすがり，「ああ，お父様，それであなたはあの人をなくされたのよ．この州が，私たち皆が彼をなくしたの．彼には私たちがいない，私たちには彼がいない．(中略) 彼は牢屋の中で」(2350ff.) と，夫の安否を気遣う．

この作品に登場する女性はみな気丈である．前述したように，シュタウフファッハーの妻ゲルトルートは夫を励まし，歴史的大事業の一歩を踏み出させ，ベルタはルーデンツを騎士の正道に戻らせていた．このヘートヴィッヒも家では夫や子どもことを心配する余り，他人のことより自分たちの方を重視しているようであったが，この台詞が示すように，自分だけでなく，皆が必要としている夫の社会的存在をしっかり認識している．女が強く，しっかりしている．それで，劇の大団円で演じられる，ルーデンツの求婚を受けるベルタの場面は，男女の平等を象徴的に表すものなのであろう．それは後のこととして，自治を取り戻すための一斉蜂起はその権力の砦を襲

うだけでなく，そこに押し込められている仲間のテルの救出と同じことになり，それ故シュタウフファッハーは彼女に，「安心なさい，私たち皆でその牢を破るために，事を起こそうとしているのだから」(2363f.) と約束する．

アッティングハウゼンは農民たちからリュートリで三州が誓い合ったことを聞き，彼らが貴族の助けなしで，独自にそこまで力をつけてきたことに驚嘆し，自分たち貴族は「もはや必要とされないなら，これで我らは心安らかに墓に入れるわ，我らが後に，―― 次の勢力により人類の栄光（Das Herrliche des Menscheit）が受け継がれていくのだ」(2419ff.) と，傍にいた子供のヴァルターの頭に手を載せ，「このリンゴが載っていた頭から，お前たちにとって新しくより良い自由が緑をつけ，古きものは滅び，時代は変わり，新しい生がその廃墟から花を咲かすのだ」(2423ff.) と，予言めいたことを言う．その内容は貴族の市民化とか，ベルンなど都市の自治拡大など具象性を帯び，王侯貴族の軍隊に対抗する農民の戦いをレアールに，霊感に包まれたかのように語り，ヴァルター・フュルストとシュタウフファッハー長老二人の手をつかんで，「だから，しっかり結束しろよ ―― 固く，永久にな ―― 自由の地では互いに他人（fremd）であってはならぬ ――（中略）統一（einig）してな，一致（einig），団結（einig）だぞ ――」(2447ff.) と言って，息を引き取る．これが老男爵の遺言となる．彼は明らかに古い貴族の時代の終わりを予感し，市民が次の時代へと「人類の栄光」を受け継ぎ，発展させて行く，それを若い世代が担うよう要請している．そのためにはお互いが他人ではなく，信頼し合った仲間でなくてはならない．これはリュートリで誓いあった「我ら兄弟のごとき一つの民族であろう」というスローガン，さらにテルが息子ヴァルターに否定的なものとして教えた「隣人同士で信頼（trauen）できない」(1810) 関係の逆で，これら 3 つは同じである．ドイツ語の ＜fremd＞ は「よその土地（国，人）の，見知らぬ」という意味の形容詞で，この作品全体でこの語は，これが元になった語も含めて 18 回使われているが，例えばゲスラーのもとに走ろうとしていたルーデンツは叔父の館で「よそ者（Fremdling）でしか」(776) なく，その代官の家来になった彼はベルタに，オーストリアという「よそ者（Fremdling）に身売りした」(1604) と非難されていた．このルーデンツがあのリンゴを射るテルの場で代官に抗議し，「他国との（fremd）すべての桎梏を切って」(2468)，この叔父の臨終に帰って来た．

その彼を若いメルヒタールはそう簡単に受け入れることができず，そっぽを向いていると，長老のシュタウフファッハーは「統一せよ！これがあの方の最後の言葉だった，そこを考えてくれ」(2485f.) と，両者の握手を促す．

メルヒタール：　　さあ，私の手です．　2486
　貴様，農民の握手も男の約束ですよ．
　僕たちなくして，騎士が何ですか．
　僕らの階級（Stand）はあなた方のより古いですよ．
ルーデンツ：それを尊敬しているし，私の剣で守って見せよう．　2490

メルヒタール：男爵，この腕が堅い大地を
　征服し，実りをもたらしますし，
　男の胸を守ることもできます．
ルーデンツ：　　君が
　私の胸を守ってくれるなら，私は君のをそうしよう
　それで，ぼくたちはお互いに強くなるのだ．　　2495
　―― だが，こんな議論は，祖州が他国の（fremd）圧政下で
　餌食になっている今，何の役に立とう．
　この地から敵を祓い清めてから，
　平和裏に，じっくり意見交換と行こうじゃないか．

こうして外部勢力の圧政に対抗する農民と貴族の同盟が成立する．オーストリアという外の（fremd）権力に対しては統一して（einig）あたるが，内には農民と貴族という二つの階級があり，その優劣という問題はペンディングにされる．アッティングハウゼン男爵は農民に慕われていたが，主人（Herr）と下僕（Knecht）の関係の中で，つまり封建制と農奴制は残されたままであった．このことがメルヒタールとルーデンツの問題と繋がるだろう．これには注意することとして，先に進もう．一斉蜂起の時期をクリスマスまでに延ばしたこと，そしてそのためテルが「犠牲になった」(2512）とルーデンツに指摘され，さらに実は「ベルタが密かに奪い去られてしまった」(2525）ので，リュートリでのその決定を変更して，直ちに決起すべきだと懇願され，農民たちも進んでそうする．

立ち上がった人民と「皇帝」の関係

テルが自力で代官の船から脱出し，ゲスラーを「これ以上この州に害を加えることができない」(2794）状態に，すなわち射殺してしまっていることを，彼らはこの時点ではまだ知らなかった．しかし，一斉蜂起に着手した時点では，ゲスラーの死は皆周知で，残るはザルネンとロスベルクの山城を落とし，ベルタを同時に救出することである．そして今，この成功の合図として決めていた烽火があがっているのが見え，鐘は鳴っている．しかし，メルヒタールからのその確かな知らせを受けてから，建設中の砦の打ち壊しをウーリ州長老のヴァルター・フュルストは始めようとしていた．ところが，他の者たちは長老の命令を待たず，事を始めようと，

石屋：　　山城の方は落ちてるぞ．
ルーオディ：ウーリ州の俺たちは，悪代官の城を
　まだ俺たちの地に建ったままにしておくのか．
　俺たちの自由宣言は最後になっちまうぞ．

石屋：こいつは俺たちを押し込めようとした代物だぞ．　2845
　やっちまえ，ぶっ壊せ！
皆：　やれ，やれ，やっちまえ！
　　(中略)
ヴァルター・フュルスト：　待て，お前たち！待て！　2852
　ウンターヴァルデンとシュヴィーツがどうなってるか，
　その知らせがまだない．とにかく使者が来るのを
　待とうじゃないか
ルーオディ：　何を待つ？あの悪代官は死んで　2855
　いないんですぜ．自由の日は明けていますぜ．
　　(中略)
　みんな来い，さあ，男も女も，始めろ！
　足場をぶっ壊せ！アーチはぶっ飛ばせ！石壁は　2860
　崩してしまえ！石積みは一つ残らずバラバラにだぞ．
石屋：来い，若い衆！こいつは俺たちで積み上げたんだ，
　俺たちで壊せれるぞ．
皆：　さあ，行って，ぶっ壊すぞ．*(四方八方から建設現場に突進する)*
ヴァルター・フュルスト：やり出したな．もう止められんわ．

長老の指令もなく，一人が始めると皆それに続き，その長老の制止もかまわず，男も女も人民たちはこれまでの鬱憤を晴らすかのように，まさに自主的に，主体的に権力の前線基地を壊し始める．フランス革命の発端となったバスティユ監獄の襲撃もこのように始まったのだろう．第 1 幕第 1 場で神頼みだったルーオディが，ここでは率先して「この州の救い主」(Vgl. 182) となり，賦役で駆り出され，この「忌わしい建物」(378) の石を積まされていた石屋の親方が，職人たちを引き連れて来て，「人間の手が建てたものは，人間の手で壊せる」(387) というテルの啓蒙精神的予言を実現している．人民たちはここまで成長したのである．そこに長老が待っていた使者として，メルヒタールとバォムガルテンが登場し，前者は二つの落城の様子を，そして特にルーデンツと共同で，ザルネンの城に押し込められていたベルタを炎の中から救出した顛末を次のように報告する．

―― 彼が貴族であるだけでしたら，
私たちは自分の命の方を可愛がっていたでしょうが，
彼は私たちと誓った仲間（Eidgenoß）でしたし，　2890
ベルタ様は人民を尊敬して下さっていた ―― それで
私たちは平然と命を懸け，どっと火の中に飛び込んだのです．

彼はルーデンツを「誓った仲間」と呼んでいる．そして命懸けで，一緒に自分の恋人を燃え盛る火の中から抱え出し，救ってくれたこの農民メルヒタールの胸（Herz, 2898）に貴族のルーデンツの方から飛び込んで，ひしと抱き合い，無言で一つの盟約（Bündniß, 2899）が誓われたのである．この若い貴族は第 2 幕第 1 場では，下僕のクオニから「一つの杯で，心は一つ」(Aus Eeinem Becher und aus Einem Herzen, 766）と，勧められた杯を拒否していたが，今は農民の胸を抱き，心（Herz）を一つにして，一つの盟約を交わしている．農民と貴族の同盟は行動を共にするなかで，このように心からの堅い信頼で結ばれたのである．メルヒタールの報告はさらに続き，父の目をつぶした代官ランデンベルクも「その父の慈悲で」(2908）命を助けてやり，州外にすべて追い出して来たと言う．これを聞くと，ヴァルター・フュルストは「その清い勝利を血で汚さなかった」(2912f.）ことを褒め，子供たちが砦の瓦礫を持って，「自由だ，自由だ」(2913）と走り回っているのを見ると，「この子たちが老人になったときも，この日のことを思い出すだろう」(2914f.）と，この歴史的事業が受け継がれて行くことを楽しみにし，少女たちが引き下ろして来たあの帽子を皆で囲んで，「あの悪代官の権力を思い出させる代物だ，引き裂いて，火にくべてしまえ」(2919f.）と聞くと，逆に「自由の印として末永くとって置くべきだ」(2922）と，歴史を保存するよう，長老としての任務を的確に果たす．

さらに，メルヒタールが「リュートリで誓ったことは立派に果たされた」(2924f.）と，終了宣言をすると，この長老は「この事業は始まったばかりで，未完成だ．我らに今こそ必要なのは勇気と堅い意思統一だ．あの国王（König）なら，ためらうことなく，殺された代官の仇を討とうと，我らが追い出した奴らを力ずくで，またここに率いて来るだろう，これは覚悟しなくてはな」(2926ff.）と，配慮を欠かさない．それに備えて，「体を張って皆で」(2935）一致して対抗しようと，相談し出したところに，「皇帝（Kaiser）が殺された」(2943）という情報がもたらされる．

皇帝を暗殺したのは，彼にあの相続領を返してもらえなかった甥のヨハン公爵とその一派で，その詳細と顛末がシュタウフファッハーの長い叙事詩的詩行で語られると，まず若いメルヒタールによって，「皇帝は貪欲に何でも取ろうとした，それで自ら早く墓穴を掘ることになったんだ」(2988f.）と，率直な個人的資質評価が下される．とにかく，これは私怨の絡んだ権力闘争で，これにより殺した側と殺された側の報復合戦となり，そういう「復讐は何も実を結ばない」(3012）が，人民の側はその件には手を染めていない，これはシュタウフファッハーの台詞から明らかである．

私たちは清い手で，血に塗られた悪事の　　3016
恵みに満ちた（segenvolle）実を採るのです．
だって私たちは大きな恐怖から解かれましたし，
自由の最大の敵は殺されてしまったのですからね．

この「血に塗られた悪事」は皇帝暗殺，「清い手」はそれに係わっていないということ，「大きな恐怖」は先ほど問題になっていた国王の報復，「自由に対する最大の敵」は自由承認状を認めず，ゲスラーを派遣した皇帝であろう．すると，この台詞の内容はこうなろう．自分たちは手を汚さなかったが，その「悪事」が自分たちに迫ってくる敵を倒してくれた，これは神の「恵みに満ちた」僥倖ということである．支配者たちの権力闘争は，無血で終えることのできた人民の蜂起とは逆に，流血で始まり，血の復讐の連鎖となろう．ところで，テルの代官射殺も「人を殺す」という点では，これと同じではないかという問題が当然起こってこよう．王権神授説が広く浸透していた当時，その皇帝を暗殺するなどは以ての外であり，その彼が派遣した代官に弓を射る行為も反逆罪である．それゆえ「1.」で書いたように，本来素朴な猟師であるはずのテルに，その実行を決心させるために，シラーはあのように長い台詞を必要としたのであろう．そしてテル個人に「流血」(2797) の責任を引き受けさせ，「自分たち史」の学習により成長し，団結して行く人民全体の筋では，二つの城を落とし，建設中とはいえ一つの砦を破壊しながらも，その攻守双方が「無血」という，現実では考えられない結果をシラーは創作し，人民たちの正義を「清い手で」守ったのだろう．これは同時にフランス革命とは違う，「激怒しても人間性を敬い，幸運勝利にても分に安んずる」[21] 道を示すためであったと言えよう．

スイス三州の人民にとってさらに幸運なことに，帝国の「自由選挙」(3022) によって「王笏はハープスブルク家から，ルクセンブルクの男爵に移る」(3020ff.) というニュースも紹介され，これでオーストリアにではなく「帝国に忠誠を守ってきた私たちには，今後正義が期待でき」(3025f.)，そのためには「オーストリアの復讐から我々を守ってくれるであろう，この新しいご主人 (Herr) を盛り立てて行こう」(Vgl., 2028f.) となる．前述したように，ここで問題になっているのはオーストリアと帝国ではなく，アルブレヒト「皇帝」と新国王ハインリッヒ七世 (Heinrich 7. 1274-1313, 王位 1308-13) 二人の人民との関係である．前者はスイス三州の自治を認めず，代官たちに侵略させ，自分の領土を拡張し，人民を奴隷 (Knecht) として支配しようとしたが，後者は自治を回復した三州を守って，前述したルーデンツの言葉を借りるならば，「席に一緒に座ること」(806) を許す，つまり人間として平等に扱い，正義を実現してくれる．言い換えれば，前者は「主人と奴隷」(Herr und Knecht) の関係で，後者は愛で結ばれた「父と子」と同じ，「主なる神と人間」(HERR und Mensch) の関係に近いものであろう．これはまさに人民の皇帝 (Volkskaiser) と呼べるもので，さらにこの人民同士はリュートリで「兄弟」(Brüder) であろうと誓ったのである．

この点は劇の進行とともに明らかになっていく．皇帝であった夫アルブレヒトを殺された王妃エルスベト[22]の文書が届けられる．その書き出しをヴァルター・フュルストが読むと，大勢は「この王妃は何をお望みだ．彼女の帝国 (Reich) は終わったのに」(3034) と怪しむ．これは前述したものであるが，「嘲笑的に」を「怪しむ」の前に加えるべきであろう．これまでスイス三州を併合し自分の領土を拡張しようと，皇帝にあるまじき狭量な政治をやってきたではないか，それを今さら何だ，亡くなった皇帝の王笏は他家に移り，あんたの帝国は終わったんだぜ，とい

う嘲笑であり，それ故この「帝国」という表現は意味深長である．この文書の本文はこうである，「王妃は三州があの人殺しどもに加勢することなど決してなく，むしろルードルフ本家（Rudorphs Fürstenhaus）より賜ったこれまでの愛情と厚情に思いを馳せ，彼らを討手（Rächer）の手に引き渡すよう，その手助けを忠実にされるよう期待します」(3044ff.)[23]．簡単にいえば，「スイス三州に犯人たちが逃げ込んだら，彼らを捕まえる手助けをしろ」と言うことである．

これに対する人民たちの反応はこうである．彼の父ルードルフからは「厚情を受けたが，息子」(3051f.）のアルブレヒトは何をしてくれたか，「彼以前のすべての皇帝がしたように，自由承認状を認めてくれたか」(3053f.)，「正しい裁判をしてくれたか」(3055)，「無実の者が罰を受けているのに，守ってくれたか」(3056)，「不安を感じて，使者を送ったのに，会って話を聞こうとしてくれたか」(2357f.)，つまり何もしてくれなかったのに，いまさら返礼を要求されても，「彼はその種をこの三州の谷に蒔いてこなかったではないか」(3063)，そう彼の罪状を長老のシュタウフファッハーは並べ立て，最後をこう締めくくる．

彼は高い地位にいたのだから，人民の父に
なることができたのに，彼が心を　　3064
砕いたのは，自分の家の者にだけだったから，
彼から利益を得た者だけが，あいつに涙を流せば良い．

この言葉に，皇帝に対する人民のすべてが込められている．自由承認状を認め，自由と自治をこれまでどおり許可してくれれば良かった．ところが皇帝は自分の私利私欲を満たすため，代官を派遣し，これまで紹介してきたような暴虐を無実な人民に行った．メルヒタールの牛を勝手に取り上げ，彼の父を裁判にかけ，目をえぐり出した件がそのよい例であろう．バォムガルテンとテルの件もそれに当たろう．この劇では，そういう横暴の数々が文学的に形象化されている．それに対して皇帝がやってはいけないこととして，勝手に税金をかけてはいけない，人民の財産を奪ってはならない，皇帝は恣意によってではなく，公正な裁判によらなければ，刑罰を下してはならない等々と抽象的に文書化したもの，これが歴史的な「マグナ・カルタ」であり，「権利の章典」である．それに当たるものが，この『テル』の農民たちに認められた自由承認状で，そこに記されている項目は皇帝の自由を抑えるもので，人民の側からの自由と自治の精神によって貫かれていたはずである．では，そのアルブレヒトの具体的な否定面をすべて抑制すると，皇帝と人民の関係はどうなるのだろうか．それは人民の側からの一般意思を託せる存在とでもいうべき抽象的なもので，それをメルヒタールは，「涙を流して欲しいなら，愛を施しておかねばならぬ」(3081）と，たったの１詩行で的確に表している．この「愛」こそ，「神と人間」のそれである．

これで最初に掲げた問題が解けよう．すなわちシラーは歴史的には皇帝でなかったアルブレヒトをその位につけ，ある時は国王，またある時は皇帝と自由に使っているように見えたが，実はこれにより，彼は最初から最後まで暴君であり，神のような皇帝であるべきなのに，そうではな

い否定的なすべての位階を登場人物の台詞を通して形象化しているのである．その彼を人民の側からそのように評価し，社会契約を結ぶ最高位にある者はどうあるべきか，これを示していると言えよう．皇帝は神の代理である法王によって塗油され，「キリスト教徒の最高の人」(266) であるのだから，自由承認状を認め，人民を愛さなければならなかったが，彼はそうしなかった．例えば，敬意を示せと命じられて，「皇帝（Kaiser）の冠だったら，まだましだ」(407) という職人の台詞にある「冠」は，「十字架」に近いものを指しているのだろうが，彼が棒の先に掲げさせたものはオーストリアの帽子であった．

「国王」は帝国の世俗的第一人者で，それゆえ人民の節度を守った蜂起には「政治的深慮から」(staatsklug, 1373) から，己の怒りを抑えてくれるかも知れない．＜Staat＞ をそう訳したが，これは普通「国家」という意味で，それゆえ彼が「帝国」という「国家的見地に立って賢く (klug)」対処するならば，目をつむってくれる，そういうことになろう，原文は「国王」ではなく「皇帝」になっているが，アルブレヒト「皇帝」はその「国王」にもなれなかったので，その前に分家のヨハンに暗殺されてしまった．直轄領であるオーストリアの「領主」として，その領土を拡張しようと，代官ゲスラーらをスイス三州に派遣したが，その地位どころかハープスブルク家の当主の任も果たせず，分家の反逆に遭って，この世から去ることになった．このように「皇帝」から本家の当主までの称号を持ったアルブレヒトの真の姿が，最初は観客に分からなかったが，中途で時々暗示されながら，そしてこの第 5 幕第 1 場のここに至って全面的に明かされる．この手法によって，日常生活で固定された「お上」とか，「泣く子と地頭」と同じように，とても勝てない「皇帝」という観念が劇の進行と共にほぐされ，新しい社会契約を創造する主体的人民と平等な人間になるよう，観客の王侯に要請される．バラバラであったスイス三州が兄弟のように親密になった州民の団結によって統一されたように，ヨーロッパ啓蒙主義の精神によって，すなわち人民の自由と自治を基礎にして，バラバラな領邦国家の集合であるドイツを統一するよう舞台の上から呼びかけられる．そして統一後の皇帝は神がしたように人民を愛し，平等でなければならない，そのために歴史的人物であるアルブレヒトを「皇帝」にしなければならなかったのであろう．そして，「皇帝」という最高権力と，労働により自然と格闘しながら社会の基礎を作っている人民という，現在でも続いている支配・被支配の関係を普遍化することに成功していると言えよう．もちろん文学的形象化による普遍化が第一であることは言を俟たないが．

三つの筋の関係

テルの特徴を「1.」では，啓蒙主義の化身と古代の英雄とし，その彼の筋をシラーは明らかに農民のそれから分断している，と書いた．テルはカントの定言的命令を地で行くという点では普遍的人間であるが，その行動はいつも英雄的な個人主義的なものである．これに対して農民たちはバラバラな集団から統一したものへと成長し，自分たちを奴隷にしようとした外部の勢力を追い出すのに成功し，自らがその地の主人になる．

その二つが交わるのはバォムガルテンを代官の追っ手から救う場面が最初である．前述したように，ここでは人民は個々バラバラである．2番目の交差は「ツヴィング・ウーリ」砦の建設現場である．そこで人民たちはブツブツ言いながらも，自分たちを支配するための牢獄を造らされている．これを見て，テルはこう言って，その場を離れる．「ここにいると気分が悪くなります」(380)．ちょっと意訳し過ぎであるかも知れないから，原文を記しておこう，＜Hier ist nicht gut seyn＞．直訳すれば「ここは事態が良くない状況です」とでもなろう．監獄を見れば，誰でも気分を害するのであって，これは当然である．テルのこの言葉はその水準なのか？　続けてテルはシュタウフファッハーに，「先へ行きましょう」と促し，「人間の手が建てたものは，人間の手で壊せる」(387) と呟くのだから，これら一連の言葉の奥には，受け身で，他力本願という人民たちの情けない様子に失望している，テルの「重い心」(418) がないだろうか．そういう状況を目のあたりにすると，目をそむけたい気分になり，彼らが自らの手で造ったものを，自ら壊せるようになるまで待とう，と言うことではないか．作品全体をそのように組み立てるために，シラーは次のような会話を二人に交わさせていた．

シュタウフファッハー：私の心はお前としきりに話し合いたがっているのだが．
テル：この重い心は言葉では軽くなりません．
シュタウフファッハー：言葉を交わしているうちに，行動へと移ることもあろう．
テル：いま唯一の行動はじっと耐え，黙っていることです．　420
シュタウフファッハー：我慢ならないことでも，耐えるべきなのか．
（中略）
テル：支配を急く者は，統治を短くするものです．　422
（中略）
シュタウフファッハー：一緒にいれば，沢山の事ができるだろう．
テル：船が難破した時は，一人の方が助かり易いものです．
シュタウフファッハー：そんなに冷たく，お前は共同の件を見捨てるのか．
テル：個々人は自分に頼るのが，最も確かなのです．　435
シュタウフファッハー：弱い者でも組めば，強くなる．
テル：強い者は一人でいるときが，もっとも強いのだ．
シュタウフファッハー：それでは，祖州が絶望的な自衛手段に
　訴える時，お前を当てにできないのか．
テル：*（手を差し出して）*
　このテルは一匹の子羊が迷子になっても，谷底から連れ戻して来ます．　440
　味方の苦境を放って置くことがありましょうか．
　だが，あなた方が何をするにしても，会議からは私を省いてください．
　私はああでもない．こうでもないと，長々やれませんが，

決まった行動に私が必要とされるならば，その時は
このテルを呼んで，決して仲間外れにしないでください．　445

この 437 詩行 ＜Der Starke ist am mächtigsten a l l e i n＞ をヒトラーは勝手に解釈して，『わが闘争』の見出し語にした，これについては「1.」で既に述べた．そもそも，この言葉から指導者原理を導き出したり，その直前のシュタウフファッハーの言葉を対立的に解釈し，他政党や労働組合を弾圧・改組させる口実に使うことはできまい．強い者同士が組んで，各人が力いっぱい戦えば，単なる足し算以上の力が発揮できるだろうし，逆に強い者でなくても，他に頼れる者がないと思い，一人で力を尽くすならば，強くなれるであろう．そして，そのように自覚して強くなった者たちが組んで押し寄せてくれば，いくら強いと思いこんでいるお山の大将でも逃げるだろう．この『テル』ではまさに，そうなっている．ゲスラーが射殺されると，「俺たちゃ，もうどんな暴力（Gewalt）にも屈しないぞ．俺たちゃ自由な人間だ」(1819f.) というシュテュッシの声に呼応して，周りにいた人民は「この州は自由だ」(1921) と叫び，大騒ぎになる．代官の腹心ルードルフ・デァ・ハラスは，「事態はもうそこまでになったのか」(1921) と，逃げ出した．

そもそもこの原文の「強い者」(Der Starke) は男性の変化をしているし，さらにこの劇では「妻と子供」を守るために男たちが立ち上がるのだから，弱い女に対する強い男という意味で，他力本願でなく，「自立した男が，もっとも強い」と取るべきだろう．すると，この二人の会話は，皆が成長して自立した個人になること，これが第一の問題と考えるテルと，妻に励まされ，主だった人々と相談するため，隣の州の長老を訪ねに行くシュタウフファッハーの立場の相違だけで，この州の自由と自治の回復という点では両者とも一致している．それゆえテルは「仲間外れにしないでください」と言って，妻子の待つ家に帰って行く（Vgl., 416）．啓蒙主義の化身としてテルは子どもに教えたように，農民が主人になるためには，「一人前の農民は自分でやる (sich hilft) ものだ」(Vgl., 1479) と考え，リュートリへの誘いを暗に断ったのだろう．

その後あのリンゴを射る場まで，テルと他の筋との直接的交差はない．しかし，シラーはその交差を用意する二人の意見対立をここでそっと挿入している．それはテルの唯一の誤算として現れ，支配を急ぐ権力の統治期間は短いから，「黙って，じっと耐えていれば」良い，と思っていたまさにそのテルが，息子の頭上のリンゴを射させられるという，シュタウフファッハーの言う「我慢ならぬ目に」遭うという結果になる．まさにそのリンゴを射る場が次の直接的交差点となる．そもそも支配・被支配という社会的権力の問題は単なる道徳の問題ではなく，その内容は対立する当事者間で違ってくる．テルは「正義を行っているのだから，どんな敵も恐れはしない」(1544) と，ヘートヴィッヒに語るが，彼女は「まさにその正義を行う者を，彼（ゲスラー，引用者）は一番憎むのですよ」(1545) と夫に忠告している．ゲスラーに言わせれば，正義は常に皇帝にあり，その皇帝は人民に，「恭順（Gehorsam）を期待されている」(2712f.)．そして，彼の台詞はこう続く．

今争われているのは，この州で　2713
農民が主人か，それとも皇帝であるべきかだ．
(中略)
わしはアルトドルフに帽子を掲げたが，　2716
戯れでやったのでも，人民の心を試すためでも
ない．あいつらの心中など，とっくに分かっとる．
わしがあれを掲げたのは，頭の高いあいつらが
わしに頭を下げるよう，教えるためだ．　2720

お上に対する「恭順」がゲスラーの道徳であり，それは心の内とは関係なく，いつも帽子に頭を下げているうちに，条件反射で自然とそうなるよう学習させる，つまり道徳を体で覚えさせるということである．この「恭順」と正反対のものが，生活の中で自然と心の内から生ずる家族「愛」とか，共に仕事をする中で生まれる「信頼」であろう．これがテルとヴァルターの父子愛，一緒にベルタを救ったルーデンツとメルヒタールの間に生まれた固い「友情」，共にリュートリに集い，外部勢力と戦った人民たちの間に育った「兄弟愛」で，これと正反対のものが，ゲスラーの言う「恭順」という道徳である．「支配と被支配」または「主人と奴隷」の関係を維持するのに必要な「恭順」である．前者は自由で平等な関係から生まれ，後者は強制とか，ゲスラーの言う「学習」または訓練，調教から生まれる．この二種類の対立と抗争が『テル』のテーマの一つである．

さて，この項での本題である三つの筋の関係に戻ろう．リュートリの場に，テルの名は最初と最後に二回出て来るが，彼に何か持ち場を任せようということなど話題にも上らず，シラーによって「仲間外れに」(445) されている．先にそこに到着していたウンターヴァルデン州のバォムガルテンは，遅れて来たウーリ州の代表の中に「テルが見えないな」と呟くだけである．そして一斉蜂起の計画を「無血で」と決めたが，未決の大問題としてシュタウフファッハーが，「ゲスラーとだけは厳しい事態を覚悟しなくてはな．彼は武装した家来に恐ろしく守られているから，戦いになれば，流血なしでは済まされまい」(1428ff.) と，懸念を表明する．すると，バォムガルテンは「テルに助けてもらった命だから，州のためなら喜んで，それを敵陣の中に投げ出します」(1434f.) と言うが，その台詞に対して，「それは弓の名人テルに頼んだら」と誰も提案せず，シュヴィーツ州のレーディングは「そのうち何か方策が浮かびましょうから，辛抱して待ちましょう」(1437) と，テルを仲間外れにして，観客の期待を裏切ってしまう．

第 3 幕第 1 場でのテル夫婦の会話でも，人民の筋との交点は，次のように暗示に止められる．

ヘートヴィッヒ：リュートリで寄り合いが
　あったんですってね，あなたもそこにいたの？
テル：俺はいなかったよ，―― だが，呼ばれたら，　1520

　　州のためだから，逃げはしないつもりだよ．
　ヘートヴィッヒ：あなたは危険な所に自分で行くし，
　　一番難しいのがいつもあなたの持ち場になるんだから．
　テル：個々それぞれ，能力に応じて割り振られるんだよ．

この会話を聞く限り，既に最も危険なゲスラーの射殺を依頼されているが，妻を心配させないように，それを隠しているのかも知れないが，とにかく表面的にはシュタウフファッハーと道行しながら，先ほど交わした内容以上のものは何もない．リンゴを射る場は前述のとおりで，ひょっとしたらテルはすべてを知らされていて，それゆえ長老二人とメルヒタールなどリュートリでの主だった者を自分の件に巻き込まないように，リンゴを射るしかないと考えていたのかも知れない．しかし，そう思わせるような気配は，誰のどの台詞にもなく，すべて観客の推測に委ねられている．そして，リュートリの会議で決行時期を遅延させたことを悔やむメルヒタールの台詞を聞けば，決行日が早められるかも知れないと，観客席は期待させられる．ところが次に，ゲスラーにテルが連行されて行く時のシュタウフファッハーの台詞，「ああ，すべてが終わりだ！お前が縛られて，皆も身動きがとれなくなった」(2090f.) という台詞には，これで決起はなくなったかと落胆させられる．このように観客は一喜一憂させられながら，舞台で演じられる劇に吸い込まれて行くが，再びテルの筋と人民のそれはシラーによって分断されることになる．

第 4 幕第 2 場では前述のように，人民と貴族の同盟が成立し，両者の筋が結ばれる．しかし，テルのそれとは行き違いになるだけである．テルが捕らえられたため，人民の蜂起はオーストリアの勢力を州外に追い出すだけでなく，そのテルを救うことにもなる．それをシュタウフファッハーは，夫を失い絶望し，怒り，たけるヘートヴィッヒを慰めるために，「安心しなさい．私たちは彼の牢屋を開けるために，皆でやろうとしているのだから」(2363f.) と，約束する．臨終間近のアッティングハウゼン男爵を，絶望させたまま旅立たせたくないないとの配慮から，リュートリでの決定通りのクリスマスに，農民たちだけで決起することを知らせる．そして農民と貴族の同盟成立直後，ルーデンツの依頼により即決行と決まる．この決定をテルに知らせることはない．なぜなら皆，彼は牢に繋がれていると，思っているからであるが，その前の場を客席で見ていた観客は，テルが代官の手から逃れたことを知っている．そして次のような会話も聞いていた．

　テル：それではビュルグレンに急いで，済まないが，　　2290
　　女房が俺のことを気に掛けているから，彼女に言ってくれ，
　　俺は助かって，大丈夫だからと．
　漁夫：だが奥さんに，あんたがどこに行ったと言えば良いのだ．
　テル：妻のところで俺の舅や，他にリュートリで
　　誓った他の者にも会えるだろうから，言ってくれ，　　2295
　　元気に，しっかり勇気を出してくれ，

　このテルは自由で，腕は確かだ，
　俺のその後のことは間もなく耳にするだろうと．
漁夫：お前さん，何か心に持ってるな，俺に明かしてくれ．
テル：それをやってしまえば，また噂に上るだろう．　2300

漁夫がテルの家のあるビュルグレンに行っても，彼の妻は息子のヴァルターが皆といるアッティングハウゼン男爵の館に走っているから，そのことづけはできない．このようにシラーによって，テルは人民・貴族の筋から分断されているのである．しかし，この漁夫との会話は，いつ何をやるかは分からないが，その二つの筋が理念上はしっかり結びついていることを，観客にこう暗示していよう，「俺はこれからやるから，皆も頑張ってくれ」と．そして「1.」で述べたように，これまで数詩行の台詞しか話せなかった素朴な猟師テルが，実際ゲスラーを射る段になると，殺人という大罪を実行に移す決心のため，長々と 91 詩行にも及ぶ心の準備をするが，そこでは父親に息子の頭上を狙わせたという個人的理由しか挙げていなかった．それ以前は「州のことから仲間外れにならない」(Vgl., 438 u.445) とシュタウフファッハーに，そして「州のために」(1521) と妻にも言っていたが，リンゴの件を体験することによって，「皆のためにとか，州のために」では済まされない，もう一つの段階があることに気づいたのではないだろうか．バォムガルテンを救ったことで，「家族のことを考えずに，無謀なことを」(Vgl., 1527f.) と妻に叱られ，「考えたからこそ，同じ子を持つ父親を救った」(Vgl., 1528f.) と応じていたが，その段階の定言命令と違うものを発見したのではないだろうか．それは前述のゲスラーの命令，「他人を救ってきたが，今は自分を救え」(Vgl., 1987f.)，これが契機になったのであろう．それ以前の段階が「私は～すべし」(Ich soll) であるとすれば，リンゴを射る段は「するしかない」(Es muß) であった．

ところで，自分の息子に向けて矢を射るよう命令したゲスラーを射殺するにしても，その理由として以前にはあったのだが，「州のため」という大義名分が後退し，「自分のため」が前面に出て来ると，これは人民の筋では禁止されていた個人的復讐に当たらないであろうか．客観的にはゲスラーは悪代官で，テルも含めた人民全体の生活を脅かす者で，リュートリの会議で問題になったように，常に大勢の武装兵に守られている彼を排除するには，流血は避けられない，ということであった．すると，弓の名人テル以外に適当な者はいないこと，これは観客の目からも明らかである．しかし前述のように，そう話す台詞はシラーによって，舞台上の人物の誰にも割り当てられていなかった．ここでも人民の筋から切り離し，テル個人の問題として彼を射殺し，そしてそれが個人的復讐ではなく，さらにカントの定言的命令以上のものとして，そしてもちろん「神とか国のために」という，これまで十字軍や 30 年戦争などで常套口実として使い古されたものではないもの，これをシラーは考えていたのではないだろうか．この劇の主題は，人民自らの力で外部勢力の支配から自らを解放し，自治を取り戻し，自由になることで，そのため「自由」という言葉はキー・ワードとして多用されている．人民・貴族の同盟は大事業を無血で成し遂げ，

自由になった．テルは「エス・ムス」(Es muß, やるしかない）という「必然，強制」(müssen) 下に置かれたままで，代官を弓で流血させると，自分の行為はそれでもやはり「復讐」だったのでは，という悪夢から自由になれるだろうか．「1.」で述べたように 2596 詩行で，テルは神に代わってゲスラーに復讐（rächen）しようとしている．しかし，2609 詩行から始まる詩節で，道路わきのベンチに腰かけ，行き交う人々を見ているうちに，自分がしようとしていることは，彼ら通行人の用事とは決定的に違う「殺人」(Mord, 2621）であることに思いが及び，愕然とする．神を盾に持ち出しても必然・強制であり，復讐は復讐を呼ぶ殺人でしかない．それゆえ，テルは自分を三人称にして，猟に出かけた父がちょっとした土産を持ちかえり，子供はそれを楽しみに待っている，そういう牧歌的な情景（Idyll）を思い浮かべ，「お前たちを，お前たちの無垢な心を，圧政者の復讐から守るために殺そうと，今から弓を引き絞るのだ（will)」(2634)．テルは復讐をするのではなく，逃したテルに「復讐」をしてくる代官から，一旦は三人称化された普遍的な父親として[24]，無垢な我が子供を守るために殺すのであり，自らの「自由意思」(will）でそうするのである．テルはゲスラーが過去にリンゴを射らせたことに復讐するのではなく，逃してしまったテルを今後も追い続け，その復讐を牧歌的に暮らしている自分の家族にするに違いない圧政者ゲスラーに，そうするのである．それゆえ放った矢が命中すると，「人民の質素な家」(Hütten, 2793．複数形であることに注意）はゲスラーの復讐から自由になり，「お前はもはやこの州を害することはない（wird)」(2794）と，未来形でシラーは書いている．それゆえ，この段階でテルの言う「州のため」とか「人民のため」という大義は，過去の権力者が政治的な常套文句として使い古し，現在でも時々唱えられるものとは全く違う水準の，自らの意志でその責任を引き受ける道徳的なものになっているのだろう．人民に「恭順」という道徳を押し付け，私的な利益を追求する「皇帝」(Herr）の「家来」(Knecht）であり続ける圧政者ゲスラーは，自由な人間として自らの暴挙を反省することなく，将来もそうする「下僕」だから，テルは以前の段階にある道徳的な後顧の憂いなく，矢を放つことができたのだろう．

テルのこのモラールは第 5 幕第 2 場でさらに明らかになる．家に帰ったテルを妻ヘートヴィッヒは喜んで迎えたが，彼の手が復讐の血で汚れているのではと恐れ，それを振り払う．その彼女を，「この手がお前たちを防御し，この州を救ったのだ，俺はこれを天に向かって挙げて良いのだ」(3143）と安心させる．「州のために」という大義名分は，リンゴの件以前の「～すべし (Sollen)」と，さらにその件での「エス・ムス」とも，自己新生したテルが自らと皆の将来のために，自らの意思でゲスラーを的に狙ら「いたい」(Wollen）とでは違うのであって，それゆえ彼は妻に朗らかに，そう言えたのであろう．いわば，以前の二つめ段階を止揚した，より高いステージに達したのだろうか．

ゲスラーはシュヴィーツとウーリの両州に派遣された代官で，悪政を重ねてきた代官であるから，彼を無害にすることは「州のために」なる，これは人民にとって当然のことであったが，テルにとってそれは個人の道徳的問題だったと言えよう．さて，あの分家のヨハネス公が僧に変装し，本家の復讐から逃れているうちに道に迷い，偶然テルの家に立ち寄っていた．彼はテルに保

護を求めようと，

僧：　　あなたは悪事を
　あなたに働いた代官を射った ―― 私も
　私の相続権を拒絶した敵を打った．
　―― 彼はあなたと私の同じ敵だったのだ ――
　私は国（Land）を彼から解放したのだ．　　3155

私たち二人は共に人殺しをした．代官はあなたに悪事を働き，皇帝も私に同じようなことをした．代官ゲスラーをこの州に派遣したのは「皇帝」で，故にこいつは私とあなたの同じ敵だった．あなたはこの州を敵から解放し，それであなたもその一人である人民が主人公になり，私も同じ敵から私が相続すべきだった国を解放し，それで私はその国の主人になった．私たち二人は味方同士だから，復讐の鬼婆である王妃エリーザベトに追われている私を助けてくれ．これがヨハネス公の化けた僧の論である．政治的にはテルの敵（代官と皇帝）の敵（僧に化けたパルチーダ）は味方になるという，権力闘争者の弁である．しかしシラーはその台詞を言った人物名の表記を，それ以前の僧（Mönch）からパルチーダ（Parrizida）に変えて，それを創作した詩人（Dichter）の立場を明瞭に表している．「パリチーダ」はラテン語で「父親を殺した者」である．皇帝と彼の間柄は実の父子ではなく，叔父と甥の関係であるが，その叔父は未成年で両親を亡くした甥の後見人で，父親代りであったので，シラーの時代ではそう断罪できた．そしてシラーはテルと彼との道徳的水準での違いをこう明らかにする．

パリチーダ：あなたの家なら慈悲をかけてもらえると思ったのに．
　あなたも自分の敵に，復讐をしたのだから．
テル：　　不幸なお方だ！
　あんたは野心から出た血なまぐさい罪と，　　3175
　父親の正当防衛をごっちゃにしているのでは？
　あんたは子供たちの可愛い頭を守ったのか．
　家族の神聖な絆を防衛したのか．
　最も恐ろしいもの，究極のものを防ぎ，お前の家族を守ったのか．
　―― 天に私はこの清い手を高々と挙げ，　　3180
　あんたとあんたの行為を呪ってやる ―― 私は
　神聖な自然法（Naturrecht）の復讐をしたのに，あんたは
　それを汚した ―― あんたと私に同じものは何もない，
　あんたは殺したが，私は最愛のものを防衛したのだ．

このようにテルはパルチーダを批判した．パルチーダはそう批判され，自分の犯した罪を自覚できたが，それでもなお跪いて，援助を頼むので，テルはこう続ける．

私があなたを助けられますか？そんな罪を背負った人間を，助けるなんて．
しかしお立ちになって，―― どんな恐ろしいことを
なさったにしても ―― あなたは人間で，私もそうだ ――
どんな人でも慰めを受けずに，テルのもとから去らせはしませんよ ――　3225
私にできることは，何でもいたしますよ．

ゲスラーに対する場合と違って，テルは彼が尊属殺人を犯したパルチーダであるにもかかわらず，三人称単数ではなく二人称で人間として扱っている．これはゲスラーが父親であるテルの懇願を受け入れず，息子に向かって射らせたのに対して，彼がテルの批判により自らの罪を悔い，単なる政治的な怪物から，道徳的人間に戻ったからであろう．人間は過ちを犯すものであるが，それを悔い，反省することのできる者と，それができず，主人の命令に従って同じことを機械的に繰り返すゲスラーのような「家来・奴隷」(Knecht) もいた．逆に，すべての人民に愛される可能性を秘めた高い地位にいたにもかかわらず，その逆に私家的な利益を追求し，民に「恭順」を強要し，憎まれ，不慮の死に際しては涙一つ流してもらえない「皇帝」アルブレヒトのような「主人」(Herr) もいた．そういう「主人」の所業を批判せず，または多分その彼がくれる贅沢に囲まれ，批判する目を眩まされたためであろうが，未亡人王妃エリーザベトという「女主人」はその仇ヨハンへの復讐に身をやつし，ゲスラーを送り込み，過酷な統治をさせたスイス三州の人民に，場違いにも，「復讐の手助けをしろ」というお触れを出し，「まだ幻の ＜帝国＞ にしがみついている」と，呆れかえられる．彼女もその夫も最初から最後まで同じ，単なる私家的な個人であったと言えよう．では人民は皇帝暗殺にどう対応したか．「何も人民に良いことをしてくれなかった国王」(Vgl., 3071) の復讐に手を貸すことも，同時にその暗殺者たちは「私たちを悲しませたこともない」(3072) のだから，彼らを追いかけることもせず，つまり両者の権力争いには素朴な人民の中立的無関心で臨むことにする．そして，「皇帝」が不慮の死を遂げたことに，すなわち自分たちと同じ人間の死に「歓声を上げよう」(3068) などとは思わない，そういう長老のヴァルター・フュルストの台詞に，節度を守る素朴な羊飼いである人民の態度が表されていよう．そういう人民の一人であるテルは，パルチーダを宗教的・道徳的に批判したという点では際立っているが，復讐者の手に渡さないという点では人民と一致し，人間に帰った彼を復讐する人間の手にではなく，神に委ねようと，その代理人がいるローマへの道順を教示する．

人民の筋の最後では，前述のように，大事業を成し遂げた人々が喜びあっていた．長老のシュタウフファッハーはその中に彼がいないことに気づき，こう呼びかけていた．

あのテルはどこにいる？彼だけを一人にしておく法はない．

彼は私たちの自由を打ち立てた男だからな．最も偉大な事を
成し遂げ，最も辛いことに耐えたのは彼だ．
皆の衆，行こう，彼の家にそろって行って，　3085
私たち皆の救い主に万歳を唱えよう．

この人民たちが連れだって，「弓の名人，救い主，テル，万歳！」と，歓声を上げながらテルの家にやってくる．この歓声が近づいてくるのを聞きながら，あのパルチーダはテルの家から一人そっと去り，懺悔の道をたどりながら，ローマに向かう．農民たちも，あの貴族も，つまり皆は家から出てきたテルを囲み，お互いに抱き合い，この自由と自治の回復を喜びあう大団円は，ベルタとルーデンツ二人の結婚式へと変わる．

ベルタ：農民の皆さん，誓い合った仲間たち（Eidgenossen）
あなた方の輪（Bund）の中に入れてください，この自由の州に
ようやく安住の場を見つけられた幸福な女であるこの私を！
あなた方の勇敢な手に私の権利（Recht）を委ねますが，　3285
あなた方は自分たちの市民として，私を守ってくださいますか．
農民たち：私たちは命と財産に懸けて，喜んでそうします．
ベルタ：　ありがとう！
では，私はこの若い男の方に，私の権利（Rechte）をお渡しいたします，
自由なスイスの市女（Bürgerin）[25] として，この自由なお方の手に！
ルーデンツ：そしてぼくは，ぼくの農奴の解放（frei）を宣言します．　3290

こうして，ベルタは自らの権利をオーストリアの支配から自由になった人民全体に委譲し，その全体はベルタという個人を守るという社会契約が成立する．彼女は政治の具として利用しようとするその外部勢力から解放され，市民の自由権を獲得したことによって，愛するルーデンツの求婚に応えることができる．人民側に付いていた牧師レッセルマンもこの集団の中にいるはずだが，その教会の手を煩わせることなく，自治を回復した人民が保証人となって，両性の自由意思に基づいた結婚がここに成立する．さらにルーデンツは自分の農奴を自由にすることによって，主人（Herr）と下僕（Knecht）の関係を廃止し，こうして叔父アッティングハウゼン男爵の予言どおり，新しい自由・平等・兄弟愛に満ちた時代の誕生となる．

もちろん彼は地方の小貴族であるため，この農奴解放宣言は彼が相続する男爵領内に止まろう．しかし，この宣言はリュートリで積み残されたものに，大きな影響を与えるに違いない．その一つは議長選出の際，「自由で（frei），自立した（eignen）男」（Vgl., 1141f.）ではない，という古くからの仕きたりにより，最年長でありながら候補から外されたウルリッヒの問題である．彼の主人（Herr）はルーデンツに倣い，彼を自由にするに違いない．もう一つは長老ヴァルター・

フュルストの提案により，「カイザーのものは，カイザーのもののままに」(1357) されたため，外部勢力オーストリアから解放された三州に残された「主人と奴隷」の関係である．これにもルーデンツの宣言は大きな影響を及ぼすに違いない．共に「兄弟」の誓いをし，統一 (einig) して代官たちに対抗し，自由と自治のために戦った人民が，「自由人と下僕」(der Freie u. Knecht) という，二つの階層を残したままにしては置かないであろう．さらに，この宣言はこの劇を観た「皇帝」や「国王」に，そして隣国フランスで進行中の市民革命の影響に神経をとがらしている，数百の領邦国家の領主たちに大きなインパクトを与えずにはおかなかったであろう．自由と自治を基本にした，人民と先進的貴族という下からの領邦国家の改革，そしてそれら州連合の「高い所 (Platz)」(3064) に座る括弧の付かない皇帝，こういうドイツ統一をシラーは考えていたのだろう．

ところで，あの長老ヴァルター・フュルストの台詞は，キリスト教国の者なら誰でも知っている聖書の言葉で，彼はその前半を言っただけである．「それではカイザーのものは，カイザーに，神のものは神に与えなさい」[26]，これがイェーズスの言葉である．こういう言葉も前後の文脈から切り離されると，とんでもないことになる場合がある．これは，イェーズスに反対する律法学者と司祭長たちが彼を陥れようと，ローマ皇帝に税金を納めるべきかと尋ねさせた時の，返答である．当時ユダヤ人の地はローマ帝国の支配下にあり，そこからの独立が彼らの悲願であった．「納めろ」と言えば，皆の悲願を捨てろということになり，「納めるな」と言えば，今度はローマに対する反逆者として弾圧の対象になるのであって，どう答えても彼らの罠にはまることになる．その時イェーズスは税金として納める銀貨「デナールを一つ見せてくれ」[26]，と言い，そこに刻印されている人物の顔と銘を尋ねて，「カイザーの」という答えを得た．それで，彼はあの言葉で，切って返した訳である．聖書では，それを聞いて，反対派は逃げ出したとある．つまり皇帝は刻印だけで，それを地銀から分離できないし，できたとすれば，すべての銀は神のものとなる訳である．長老ヴァルター・フュルストの台詞では，「下僕・奴隷」はカイザーのもので，封建制の基礎を残したままでのスイス三州の自治回復に止まるが，ルーデンツの宣言はそれをも崩すものであって，まさに人民を「カイザー」から解放し，神の前で平等な人間にすることになろう．もちろん中世の教会支配に戻るのではなく，ルターの宗教改革により，人間の作った教皇や教会支配から脱した人間が，自ら神との関係を結ぶという，自立した個人による信仰から生まれる神である．

最後に，ゲスラーを射殺し，帰ってきた父テルともう一人の息子ヴィルヘルムとの会話を聞き逃してはならないだろう．

ヴィルヘルム：ねえ，お父さん，弓はどこにあるの，　3136
　ぼくには見えないよ．
テル：　　あれはもう見られないよ．
　神聖な所に納めてあるんだよ．

これからはもう，どんな猟にも使わないんだよ．

もちろん子供の前だから猟と言っているだけで，その最後の標的になったのは，前述したように，三人称化されていた代官ゲスラーである．もはや「流血」の殺人の武器は必要ないという訳であるが，それを将来にわたって保障するのは人民・貴族による「無血」蜂起の成果である．そして，武器を捨てたというこのテルのメッセージは，「皇帝」を頂点とする領主（Fürsten）に向けられたものであろう．ゲスラーは「矢は射手に跳ね返ってくるものだ」(1974）と言い，武器を持つテルに，「子供に向かって射て」と，矢を跳ね返らせた．同じように武器を持つ家来に囲まれている代官にはテルの矢が跳ね返ってきた．その代官がいなくなれば，弓は不用であろう．さらに「命令する立場の者以外，誰も武装などしてはならぬ」(1977）という彼の台詞にあったように，皇帝が武器を背景にして人民に恭順を求め，そして命令によって「家来」(Knecht）と「人民」(Volk）を働かせるのではなく，愛によって治めれば，武器はやはり不用となろう．人民と結んだ貴族ルーデンツの上からの宣言で農奴が解放され，人民の一人テルによって武器廃絶が呼びかけられる．その二つが実現した暁に，統一したドイツの地に，いや世界中に広がる牧歌的な情景（Idyll）を，シラーはルーデンツやメルヒタール，そしてリンゴを頭に載せた息子ヴァルターに託して，この最終場の幕を降ろしたのであろう．ところでテルのそのメッセージは「皇帝」に届いたであろうか．

完

注

1　Aristoteles, *Poetik* Griechisch/Deutsch, Philipp Reclam jun. Stuttgart 2003. S. 29.

2　この作品からの引用は次のものによる．Schillers Werke, Nationalausgabe, Weimar 1980. Bd. 10. これからの詩行数は他の版のものでも一致しているはずで，頁数より便利であろう．

3　*Erläuterung und Dokumente Friedrich Schiller*, Reclam, Stuttgart 1969. S. 12. 訳語の「塗油」は油を塗られる人を祝福し，聖なる者とするための儀式的行為―引用者注．

4　Matthias Becher, *KARL DER GROSSE*, Sonderausgabe, C. H. Beck Verl. München 2008. S. 13.

5　引用したレオ三世の言葉に下線を引き，訳ではそのラテン語の発音でそのままに残したのは，ドイツ語の「皇帝」(Kaiser）に当たる言葉がどこにもないことを示すためである．ドイツ語の Kaiser は，「1.」で書いたように，「ユリウス」(Julius）家出身の男性に添えられた名「カエサル」(Caesar）に由来する．ちなみにロシア語の「ツァー」(Zar）も同じである．このカエサルが持っていた称号が二番目の下線で示した「インペラトール」(正しくは，imperator）で，意味は「軍の最高司令官」となる．この称号が英語の ＜emperor＞，フランス語の ＜empereur＞ という「支配者，皇帝」となるのであって，どちらもこのシーザーにちなむ．この彼の遺志を継ぎ，紀元前 31 年アクティウムでその反対派を破り，独裁権を獲得したのがガイウス・オクターヴィアーヌス（Gaius Oktavianus BC. 63- AD. 14）で，彼に元老院から贈られた名誉称号が「アウグストゥス」(augustus）で，意味は「高貴なる者，名誉ある者」であり，これがローマ帝政時代の「皇帝」の称号である．復活した「ローマ帝国」の「皇帝」が「アウグストゥス」ではなく「カイザー」になったのは，ガリアの地でゲルマン人と戦っていたユリウスが「軍の最高司令官」と，その添え名「カエサル」で呼ばれていたことに起因するのであろう．

6　「ほぼ」と書いたのは，例えばこの王朝で最初に国王になったコンラート三世は，この本文中で王位だけに止めておいたように，彼のように強力な国王であっても，教皇に戴冠されなければ，皇帝にはなれなかった．実際彼はそのためのローマ詣での計画中に亡くなってしまった．

7　Frank Rexroth, *Deutsche Grschichte im Mittelalter,* C. H. Beck Verl. München. 2008. S. 83.

8　これで神聖ローマ帝国は滅び，次に普仏戦争で勝利したプロイセン国王ヴィルヘルム一世（1797-1888, プロイセン王位 1861-88, ドイツ帝位 1871-88）が 1871 年ヴェルサイユでその終戦条約を結び，「ドイツ帝国」の「皇帝」を名乗る．第一次大戦後の 1919 年に共和国となるが，1933 年ヒトラーが政権を獲得すると，その共和国憲法を廃止し，「帝国」の「宰相」(Kanzler)・「総統」(Führer) と名乗り，800 年に誕生したフランク国王カールの帝国を第一の，1871 年から 1917 までのドイツを第二のそれと呼び，自らのを「第三帝国」と称した．彼の「千年帝国」は第二次大戦の無条件降伏で 1945 年に終わり，東西ドイツに分裂し，1990 年の「西による東の併合」または「ドイツ統一」により，ドイツ連邦共和国として現在に至る．

9　NA. B. 3. S. 21.

10　Vgl. Rüdiger Safranski, *Schiller oder Die Erfindung des Deutschen Idealismus,* C. Hanser Vlg. 2004. S. 495.

11　この戦いは 1240 年から翌年にかけてのもので，「森の州から 600 名のスイス人がフリードリッヒの軍に属していた」(Vgl. NA. B. 10. S. 505). この 1240 年にアッティングハウゼン男爵が参加しているとすると，現在は 1300 年頃と舞台設定されているため，彼は今 80 歳ほどの老人となろう．ところで過去にフリードリッヒという名の皇帝は二人いて，その一人はこの 1240 年に皇帝であった二世（王位 1237-54）で，彼はシュタウファーとヴェルフェ両家の王位争いの時代（1237-1272）の国王で，1220 年 11 月 22 日に帝冠を受け，それにより十字軍に参加すると誓っていたが，それをなおざりにし，1227 年グレーゴル九世に破門された．それでも彼はイェルーザレムに行軍し，そこの国王になった．1230 年破門が解かれ，1239 年再び破門され，1245 年に帝位を解かれた．ファーベンツの戦いは 1240-41 年だから破門中の皇帝となる．もう一人はシュタウファー朝の同名の一世（Friedrich 1. Barbarossa, 王位 1152-1190）で，彼は最初のイタリア遠征（1154/55）で，1155 年 6 月 18 日に教皇から戴冠されている．『テル』では歴代の皇帝たちによって自由承認状は認められてきたのだから，後者のフリードリッヒが以前に係っていても良いだろう．次の注参照．

12　もちろん史実として，そのような文書は残されていない．「ウーリ領が 1231 年以来，帝国から独立した法的地位を持っていたということなど問題外で，後にハープスブルグが再攻略の進行過程でも問題にならなかった．問題になるのはシュヴィーツの状態である．この州民には 1240 年皇帝の自由状 (Freiheitsbrief) が交付されていたが，それにもかかわらず 13 世紀の終わりにはハープスブルグ家の裁判権下にあった．ニートヴァルデンもオプヴァルデンも 1291 年以前にそのような特権を享受するには至ってなかった」(Volker Reinhardt, *Geschichte der Schweiz*, Verl. C. H, Beck. 2007. 2. Aufl. S. 13) 引用したこの「スイス史」はハープスブルグ家による支配関係から始めているのであって，それ以前のシュタウファー家によるものはないことになろう．それ故これはシラーの創作であろう．

13　普通「暴君」などと訳されるが，それでは「皇帝」や「国王」を指していると解されかねない．＜Tyrann＞ はシラーの時代に近い 1828 年出版の Dr. Friedr. Alb. Riemann 編の"Fremdwörterbuch" (Verl. Gottfr. Basse, Duedlinburg u. Leipzig) では，＜Beherrscher＞（支配・統治者），＜Zwingherr＞（圧政者）とある．この『テル』でシラーはこの派生語も含めて 29 回使っているが，ほとんどが代官たちのことを指している．特に 1290 から 5 詩行までのレッセルマンの台詞がそれをよく表している．彼は「皇帝」(Kaiser, 1291) と和解すれば，「圧政者ども」(Tyrannen, 1292) はあなた方におもねってきます，と言って，両者をはっきり区別している．

14　この ＜Land＞ には「陸，土地，田舎，国，州」など色々な意味があり，訳すのに苦労する語の一つである．ここではウーリ，シュヴィーツなどの「州」の意味であり，オーストリアに対して私たちの「国，郷」であり，私たちが創り上げてきた「土地」の意味でもある．そういう意味で以後この語

に「州」の字を当て，「くに」と読むこととする．

15　Daniel Sanders, *Handwörterbuch der deutschen Sprache.* Verl. Otto Wignad, Leiprig 1878. S. 807. Links.

16　「1.」で書いたように，カントの定言的命令が課した人倫の究極な「倫理」(Sitte) に従ってテルは「善」を実行するが，ゲスラーに対してはカントに逆らって，ホッブスの抵抗権を行使する．

17　彼は「下僕たち（Knechte）と昔からの家のしきたりに従って，朝酒を交わして（口をつけた杯を順に回しながら)，かつては自ら野や森に一緒に出かけ，目の前で働く彼らを指揮し，戦場では旗で率いたものだが，今ではここで監督することしかできない」(752f.) 高齢である．下僕のクオニはその回ってきた杯をルーデンツに「一つの杯で，心は一つ」(766) と，差し出す．これらの台詞から，男爵と下僕たちは共に働き，心を一つにしていることが分かるが，ルーデンツはその杯を拒絶する．

18　Mmanuel Kant, Werkausgabe XI. Suhrkamp, Frankfurt 9. Aufl, 1991, S. 53.

19　ゲスラーは実際にテルがそうするとは思っていないから，「人をなぶり者に」して喜んでいるのである．エラスもこう書いている．「リンゴが落ちた．ゲスラー自身それが理解できない．あいつは射った？ええ？気違いめ！」(Vgl., Norbert Oellers, *Schiller—Elend der Geschichte, Glanz der Kunst—* Philipp Reclam jun. Stuttgart. 2005. S. 304.) 確かに帽子を敬えという命令を出し，それに違反したテル親子の命を奪い，財産を没収するなどという刑法は問題外であるが，それを盾にして，このように人をなぶりものにすることは，人間の尊厳を傷つけるもので，法律以前の道徳的規範を著しく逸脱している．

20　清水純夫，「ゲーテの『若きヴェルテルの悩み』再考」，『世界文学』No. 110，2009 年 12 月発行，44 頁．

21　拙論「シラーの『ヴィルヘルム・テル』について　1.」，『日本福祉大学研究紀要　現代と文化』第 117 号，2008 年 3 月，11 頁．シラーからダールベルクに献じた詩の拙訳．

22　原語は ＜Elsbeth＞ であるが，これは「エリーザベト」＜Elisabeth＞ の短縮形である．王家の公式文書にそのような名前を使うはずはなかろう．これを皆の前で読むヴァルター・フュルストのこの文書を軽視する気持ちを表していると言えよう．和訳では例えば「王妃ベトちゃんは」とするのも良いのではないか．

23　前述したように ＜Fürst＞ は「支配者，第一人者」の意味で，ここにある ＜Fürstenhaus＞ を「皇帝家」または「王家」と訳すと誤解を生む恐れがあるため「本家」と訳した．つまりその前者のどちらにしても，あの凶行に及んだヨハン（Johann, -1313）はハープスブルグ家の創始者ルードルフ一世（Rudorf 1. 1218-91）の孫にあたり，王家の一員である．アルブレヒトはその長男で，二男であるルードルフ二世（Rudorf 2. -1290）とベーメンのアグネスの間に生まれた長男があのヨハンで，本家のアルブレヒトから見れば「分家」の息子で，彼の甥になる．それゆえ同じ王家の本家の当主が分家の息子が幼くして親を失ったため，その親代り，つまり後見人になっていたが，彼が成人になっても，その相続財産を返さないから，凶行に走ってしまったということである．つまりこれは本家と分家の，肉親同士の争いである．この文書にある「ルードルフ」はもちろん一世を指している．

24　カントの定言命令は「君の意志や格律が，いつも同時に普遍的律法の原理として妥当するように行為せよ」(*Critik der practischen Vernunft.* Riga, bez Johann Friedrich Hartknoch 1788. S. 54.) で，下線部で示したように「普遍的」でなければならない．シラーは 2622 から 34 までの 13 詩行で，テルを三人称に普遍化して，二人称の子どもに話しかけている．詳しくは，「1.」(注 20 の 21 頁) を参照．

25　「市女」の 原文は ＜Bürgerin＞ と，「市民」＜Bürger＞ の女性形になっているため，「市女」と訳した．この「市民」の語源は「城」(Burg) で，かつて外敵襲来の際に命と財産を守るために「城の内に逃げ込める人」で，その権利が「市民権」となる．そして外敵に対して「城にこもって共の戦う人」は「仲間，味方」となる．ベルタはまさに外敵から守ってくれる皆の輪の中に入ることを許され，「市女」となる訳である．

26 「*ルカによる福音*」第 22 章第 25 節，Elber felder Bibel, R. Brockhaus Verl. 2. Aufl. Wuppertal.. 2008. S. 115. なお同じような記述は「マテーウス」の第 22 章第 21 節，「マルクス」の第 12 章第 17 節にもある．

27 Ibid. Lukas 20. 24.